茅の人形を人尺に作り夫婦の名字をうちに籠め三重の高棚五色の幣おの〳〵供物を調へて肝膽を砕き祈りけり謹上再拜夫天開け地固まつしより此方伊弉諾伊弉册の尊天の磐座にしてみとのまぐはひ（結婚の事）ありしより男女夫婦の語ひをなし陰陽の道長く傳る夫に何ぞ魍魎鬼神妨げをなし非業の命を取らんとや「大小の神祇諸佛菩薩明王部天童部九曜七星二十八宿を驚し奉り祈ればふしぎや雨降風落ち神鳴稲妻頻りに満ちく御幣もさゞめき鳴動して身の毛よだちて恐ろしや（出典不詳）「夫花の斜脚の暖風に開けて同じく暮春の風に散り月の東山より出で、早く西嶺に隠れぬ世上の無常斯の如し因果の車輪の廻るが如く我に憂かりし人々に忽ち報を見すべきなり戀の身の浮む事なき賀茂川に「沈みし（地上）の、水の青き鬼「我の貴船の川瀬の螢火「頭に戴く鉄輪の足の「炎の赤き鬼となつて（同上）臥したる男の枕に寄りそひいかに殿御よ珍しや（打上）「恨めしや御身と契りし其時の玉椿の八千代」二葉の松の末かけて變らじとこそ思ひしになどしも捨のはて給ふらん「あら恨めしや捨てられて思ふ思の涙に沈み人を恨

（シテ下ゲ）

「夫をかこち　（同上）　ある時の戀しく　（シテ下ゲ）　「又の恨めしく　（同上）　起きても
寢ても忘れぬ思の因果の今ぞと白雪の消えなん命の今宵ぞいた
（仕舞狂り込）
しや　（ヨワク）　惡しかれと思のぬ山の峯にだに〳〵人の歎きの生
ふなるにいのんや年月思ひに沈む恨の數積つて執心の鬼となる
（シテ下ゲ）　（シテ下ゲ）　（同上）
も理や　「いでいて命を取らん〳〵としもとを振上げうのな
りの髪を手にからまいて打つやうつの山の夢現ともわかざる浮
世に因果の廻りあひたり今さらさこそ悔しかるらめ偖懲りや思
（シテ下ゲ）　（同下ノタ）　（中）
ひ知れ　「殊更恨めしさ〳〵あだし男を取つて行かんと臥し

たる枕に立寄り見れば恐しや御幣に三十番神ましまして魍魎鬼
神の穢らはしや出でよ〳〵と責め給ふぞやはらたちや思ふ夫を
ば取らであまさへ神々の責を被る惡鬼の神通通力自在の勢ひ絶
えて力もたよ〳〵と足弱車の廻りあふべき時節を待つべしや先
此度の歸るべしといふ聲ばかりのさだかに聞えていふ聲ばかり
聞えて姿の目に見えぬ鬼とぞなりにけるにけり

五番目　藍染川　季ナシ

（六十九）賭脇能

前シテ　京女
子方　梅千世
ツレ　左近尉

後シテ　天満天神
ワキ　太宰府神主
トモ　従者

大第二カシラ
ヨワク「忘れの草の名にあれど〳〵忍ぶの人の面かげ　「是の一條今
出川に住む女にてひげにやあだなる契とて心をさへに筑紫人の。
袖ふれそめし憂き中の疎くなりぬる身の果の鬼にも角にもあら
ばあれ此子が爲に父を尋れて　下歌　二人　馴れも馴れぬに遠旅の心の子
にや迷ふらん　上歌　二人　筑紫との西ぞとばかり聞しより〳〵月の入
さを知べにて行くへも知らぬ旅衣野山幾重か重ぬらんかゝる思
を菅の根の長門の關路程もなく香椎博多を打過ぎて宰府にはや
くつきにけり〳〵　女詞　「あら嬉しや急ぎひほどに宰府とやらん
に着てひ先此所にて宿を借うずるにてひ此方へ來りひへいかに
此屋の内へ案内申ひ　サコ詞　「誰にて渡りひぞ　女　「是の都方の者にて
ひ一夜の宿を御貸しひへ　サコ　「心得申ひ是の女性旅人にてひ程に。
奥の間に置申さうずるにてひ此方へ御入りひへ　女　「いかに申ひ。
此所に宰府の神主殿と申人の渡ひか　サコ　「中々の事此在所の主に
て御座ひ我等も其御内の者にてひ　女　「都より文をことづかりて
ひ神主殿へ參らせられて給のりひへかし　サコ　「易き御事にてひ聽

藍染川

て届けて参らせうずるにてひ　女「あら嬉やひ去ばこの文を参らせひ御返事を取て給りひへ　「心得申ひ誰か渡ひ〳〵」「さんひ神主殿へ申上べき仔細あつて参りてひ〳〵「其の畏れがましくひ

〳〵「都より女性旅人の我等が宿に御泊りひが此文を神主殿へ参らせよと申されひ〳〵「畏つてひ〳〵「さんひ幼き人をつれ申されてひ

〳〵「未だ某が屋に御座ひ〳〵「言語道断左様の御事をば存ぜずひ程に止置きてひ去ば軈て追出し申さうずるにてひ〳〵「いかに旅人へ申ひ唯今の文を神主殿へ御目にかけてひへば軈て御返事を賜て

ひ急いで御覧ひへ　女「あら嬉やと早く御届けひもの哉去ば軈て御返事を見うずるにてひ御下り珍しくひへ共男の身なり共遙々の遠國に獨りの下り難しいか様珍しき人に誘れて御下りかと思ひひへば對面申事のあるまじくひ是の梅千世が方へ申ひ本より此身の不肖なれば親あり共思ふべからず早々都に歸り給へあら〳〵つれなやつれなと書かれたりこれの夢かやあら淺ましやひ

子岡「いかに母上いたくな御歎きひそ梅千世斯てひへば御心安く思召せ　女「げに子ながらも恥しや父が心の變る事を身の上に嘆く

と思ふかや御身を父に見せ一跡をもつがせばやと思ひてこそ遥々伴ひ下りたるに孤となすべき事の悲しさよ　子「よしの、う夫も力なし今更何と嘆くべき　上歌同　筑紫人虚言すると聞つるに〳〵。頼みけるこそなか〳〵にはかなかりける心哉かきくらす心の闇の只管に夢現なき道のべの便と頼む木蔭さへ今の身となるべしと思ふにつけて獨り子を殘置くべき悲しさよ〳〵

ナコ同

女「いかに申ひ御痛しうひへ共神主殿より此所にの置申なとの御事にてひ間急いで此家を出でて何方へも御出あらうずるにてひ

女「いかに梅千世　子「何事にてひぞ　女「此儘都に上らん事も人目さすがにひへばあれなる庵室に立越え様かへばやと思ふ也お事の是に待給へ　子「いや〳〵母の御氣色心もとなくひ程に離れ申す事のひまじ　女「うたてやな父こそ變給ふ共母が心の變るべきか唯々お事の此所にて母が歸さを待給へ　子「母の仰を眞と思ひ去ばと〳〵歸給へ　女「母の今こそ限なれと下安からぬ思ひの色行きもやられぬ袖の別れ　子「引止められて　女「親ごゝろの

思ひ煩らふ母が身の〳〵亡き跡いかゞと別れえぬ今の憂き身

哉兎に角に歸らん迄の待給へと夕顏の空目して藍染川に身を投
ぐる〳〵「何と申すぞ藍染川に人の身を投げたると申すか。
いか樣なる者ぞ立越え見ばやと存ひや言語道斷いかなる者ぞと
存てひへば某が所に泊りたる女性にてひのいかにのう梅千世殿。
母御の身を投げ給ひてひぞ急いで御覽ひへ「のう母上恨めし
の御有樣やな母御の斯てましませばこそ賴もしく思ひひつるに。
是の夢かや淺ましや悲しやな知らぬ筑紫の果に來て父母さへ
に捨子となるみづからの誰を賴むべき末の露もとの雫もよ

しやよし我とてもながらへ果し身を捨て母に追付き申さんと藍
染川に歩み行く〳〵
を投げ給ひての儕母御の御跡を誰か弔ひ申べき只思召し止り給
ひひへ是の母御の遊ばされたる文にてひ御形見によく御持ちひ
へ斯る痛のしき事こそひのれ「是の宰府の神主にてひ我此間
の他所にひひて唯今罷り歸りひあらふしぎやあの藍染川に人の
多く集りてひの何事にてひらんや推量申してひ某他所にひ間に。
網を引かすると存じひいかに誰かある「御前にひ「あの藍

染川に人の多く集りてあるの網をばし引くか殺生禁断の所にてあるに急いて皆々あがれと申付けひへ「畏つてひやあ〳〵神主殿の御出でにてあるぞ網をばし引くか殺生禁断の所にてあるぞ急いで皆々上りひへ何と人の身を投げたると申かや左近の尉にて渡ひか是へ神主殿の御出にてひ急ぎ御参りあつて此謂を御申ひへ「心得申ひ「いかに申上ひ網にてのなくひ人の身を投げたる由申ひあれに左近の尉がひひて謂を申上げうずるこて是へ参りてひ「いかに左近の尉身を投げたると申すの如何様なる者ぞ「さんび都より女性の人を尋ねて下ひが逢のぬを恨み身を投げたる由申ひ「言語道断都より遙々下りたるに逢のねの不得心なる者にてあるよなあれなる幼き者の如何様なる者にてあるぞ「彼の彼の者の子にてひ「手に持たるの文にてあるか「さんび文にてひ「そと見たき由申して取て来ひへ「畏つてひのう其文をそと人の御覧ぜられたき由仰せひ給りひへ「いや是の母御の御形見にてひ程に参らせひまじ「そと御覧じて返し申されうずるにてひ此方へ給りひへ文を取りて参り

てひ　「是の梅千世が方へ、書置きひ、憂き身の元より捨妻のきぬ
〳〵なれば、恨もなし、いかに情知らず共子に知れぬ親のひべきか、
いひがひなく出家になし扶持し給ひ、草の陰にて守の神となる
るべき也、大内に在し時の梅壺の侍従、一條、今出川の御留主當所の
御名の知られ共御在京の御時の中務顆澄宰府の神主や言語道斷
の次第にてひもの哉、今迄他所の事とこそ存てひに斯るふしぎ
なる事こそひのね、あの幼き者を此方へ連れて來りひへ　「畏つ
てひ、いかに申ひ、神主殿の物仰せられうずると仰せひ此方へ御出

でひへ　「あら不便の者や、偖眞の父に、逢ひたくはなきか
「斯程に情ましまさば父に逢せてたび給へ　「げに〳〵是の理也
と名のらんとすれば涙に咽び
夫と見えれど梅千世が顔も姿も馴れし母にたがひぬ面影の是こ
そ父よむざんやなさこそ便も嘆の力をそへてゆふつけの取付き
髪かき撫でよそ目思ひぬ氣色哉　「いかに左近の尉餘に彼者不
便にひ程にそと見うずると思ふのいかに　「御意尤にてひさり
ながら御妻にてのいかゞにて御座ひ　「げに〳〵汝が申如く惣

して死人を見る事のなけれ共彼者の心中餘に不便にある間苦し
からぬ事そと一目見うずるにてあるぞ死骸のあたりなる人をの
けひへ「畏つてひやあ〳〵神主殿御出であるぞ皆々のきひへ
「いかに申ひ。偖も御下り夢にも知らずひ梅千世が事の某一跡を譲
り世に立てうずるにてひ又御跡をも懇に弔いて參らせひべし。か
まへて我を恨み給ふなと云へ共〳〵いへども平生の顔色の草葉
の色に異らず芳態あらたに眠りて眼蓋を開く事なし嬋娟の黒髪
亂れて草根にまとひり婉轉たる黛の消失て面影の亡き身の果

ぞ悲しき「紅顔空に消えて華麗を失へり飛揚の魂何所にか獨
り趣くあり様哀むべし累々たる古墳のほとり顔色終に消失て郊
原に朽果て、思ひや跡に殘らん＊「いかに左近の尉彼者の心
中餘に不便にある間臨時の幣帛を捧げ肝膽を砕き彼者の命を二
度蘇生させばやと思ふひいかに「げに〳〵是の尤にてひ
「然るべうひ＊「神主御幣お
つ取つて神前に參り跪き既に祝詞を申けり謹上再拜我此道場如
帝珠十寶二寶影現中我身敬禮三寶前頭面接足歸命禮南無天滿天

雲に神廣く舊里を去つて遍く幕下を兼れたり名才衆に越え明智世に勝れ西海の西都に安樂寺の地を點して春秋を招く「や本地覺王如來寂光の都を出でて此太宰府に住給ふ出端「唯賴めしめぢが原のさしも草我世の中に有ん限の「御殿頽りに鳴動して顯れ給ふぞ辱なき打上「昨日の北闕に〳〵悲みを蒙る身なれ共けふの西都に蘇生さんと生きてうらみ死して悅ぶ有難の誓ひや

シテ下ゲ小謠「抑當社と申の〳〵法性の都をいでて、分段同語の境に入つしより此方冥々こある苦海に沈み菩提涅槃に至らず爰に宿因内に通して受け難き人身を受け智識外に助け逢ひ難き誓ひの春に又あふ事も唯これ當社の神恩そとよろこびの祝詞を奉れば神のあがらせ給ひけり●

四番目
略三番

雲雀山

四月

シテ メノト侍従　ワキ 橘佩右大臣
ツレ 男　中將殿　トモ 橘佩従者

男聲

「斯様にひ者の奈良の都橘佩の右大臣豊成公に仕へ申す者にてひ。
偖も姫君を一人御持ちひなさる人の讒奏により大和紀の國の、
なる雲雀山にて失ひ申せとの仰せにてひ程に是迄御供申てひへ
共いかにして失ひ申べきと存じ柴の庵を結び兎角いたわり申ひ。
さる程に侍従と申す乳母春の木々の花を手折り秋の草花を取り
て里に出で往來の人に是を代なし彼姫君を過し申ひ今日も侍従
を呼出し里へ下さばやと存ひいかに申べき事のひ　シテ「何事にて

ひぞ　男「けふも亦里へ御出でひへ　シテ「さらば姫君に御暇を申ひ
べし　男「聽て御暇を申し里へ御出でひへ　シテ「いかに申べき事の
ひ今日も里へ出て聽て歸りひべしヨハク「げにや閑窓に煙絶えて、
春の日いとど暮らし難う　シテ上「弊宝に燭消えて秋の夜猶長し家貧
にしての親知少く賤き身にの故人疎し親しきだにも疎くなれば
下歌同　よそ人のいかで訪ふべきさなきだにせばき世に隠れ
住む身の山深みさらば心のありもせで唯道せばき埋れ草露いつ
迄の身ならまし〳〵斯て煙も絶え〳〵の光の影も惜き

また他所の情を頼まんと草の戸ぼそを引立て、又里へこそ出てにけれ〳〵（ワキ立花大夫ツヨク）傾く嶺の雲雀山〳〵上るや雲路なるらん

（ワキ詞）「是の横佩の右大臣豊成との我事なり（立素）夫狩場の四季の遊びにて時折節の興を増す（上歌）梓の眞弓春くれば〳〵霞む外山の櫻狩雨の降來ぬ同じくの濡るとも花の木陰に宿らん偕又月の夜を殘す雪にのあくる交野の御野禁野に續く天の川空にぞ雁の聲の居る〳〵（ヨハク）さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞするげにや昔も君の爲故ある果を集めつゝ常世の國迄行きしぞ

かし我も主君の御爲に色ある花を手折つゝ葉末に結ぶ露の御身を殘しやすると思ひ草いろ〳〵の頃をえて咲く卯の花の杜若

（地上ゲ）（小歌）「むらさき染る山草の「色香にめでて花召されひへ月の見〳〵憂世を廻る影もはづかしの森の下草咲きにけり花ながら刈りて賣らうよ日頃へて待つ日の聞かず時鳥匂ひもとめて尋れ來る花橘や召さるゝ〳〵（ワキ）いかに尋れ申べき事のひ其花をばいかなる故ある人に參らせん爲に持給ひてひぞ（シテ）「さんひ是の故ある人に參らせん爲に持ちてひ何れにてもひへ色香にめでて

て召されひへ花檻前に笑んで聲未だ聞かず鳥林下に鳴て涙つき
難しげにも盡きぬの花の種色々なれや紅のいづれ深百合深見草。
御心よせに召されひへとよ　トモ

る事の分きて謂のあるやらん　シテ「あらむつかしとお尋れあるや。
召されまじくのお心ぞとよ　地上同上　※色々の人の心の白露の枝
に霜の置くとも猶常盤なれや橘の目さまし草の戯れ其方の身に
の何事も包む事のなくともこし方なれやいにしへをも忍ぶ草を
召されよや　シテ「朝もよひ　地紀の關守が手束弓入るさ

か歸るさか何れにてもましませなどや花の召されぬあら花すか
ずの人々や花すかぬ人ぞをかしき　トモ同
し又御身のこし方を懇ろに御物語ひへ　シテ上同又「さらば此花を買取りひべ
行く雁の花なき里に住みや習へると心そらなる疑ひ哉　同上「春霞立つを見捨て、
く春の夢のうち胡蝶の遊びも色香にめでしも皆是心の花ならずや
の惜ければ衣替へ憂きけふにぞありける夫のみかいつしかに春

を隔つる杜若いつから衣遙々の面影残るかほよ鳥の鳴きうつる
聲迄身の上にきく哀さよ斯てぞ花にめで鳥を羨やむ人心思ひの
露も深見草のしげみの花衣野をわけ山に出て入れども更に人の
白玉の思ひのうちにあれど色になどや現れぬ「去にても馴れ
し儘にていつしかに今の昔に奈良坂や兒手柏の二面兎にも角に
も故郷の他所目になりて葛城や高間の山の嶺續き爰に紀の路の
境なる雲雀山に隱居て霞の網にかゝり目路もなき谷陰の鴫の草
くきならぬ身の露に置かれ雨に打れ斯ても消えやらぬ御身の果

ぞいたのしき遠近の 舞「遠近の
なくも呼子鳥の雲雀山にや待給ふらん いざや歸らん〳〵

同上 ノルたづきも知らぬ山中に覺束

「やあいかにお事の乳母の侍從にてのなきか豊成をば見忘れてあ
るか僧も我姫よしなき者の讒奏により失ひしかども科なき由を
聞き後悔すれども適ず誠やお事が計ひとして此雲雀山の谷陰
に栄の庵を結び隱し置きたるとの聞きしか共誠しからぬ所に今
お事を見てこそ僧のと思へ姫のいづくにあるぞ包まず申ひへ

「是の仰せ共覺えぬもの哉人のかことを御用ゐありて失ひ給ひし

中將姫の何しに此世にましますべきいかにお尋れ有とても　今
の御身も夏草の茂みにまじる姫百合の知られぬ御身なり何をか
尋れ給ふらん　「げに〳〵夫のさる事なれども先非を悔ゆる父
が心涙の色にも見ゆらんものを早あり所を申すべし　「誠さや
うに思召すか　「なか〳〵諸天氏の神も正に照覧あるべき也
「さらば此方へ御出であれと其所とも知らぬ雲雀山の草木をわけ
て谷陰の栞を道にあしびきの　山ぶところの空木に草を結び
草をしきて四鳥のねぐらに親と子の思ひず返り逢ひながら互に

見忘れて唯泣くのみの心かなげにや世の中の定めなきこそ定め
なれ夢ならば覺めぬ間に早と〳〵とありしかば乳母御手を引
立ててお輿に乗せ參らせて御悦びの歸るさに奈良の都の八重櫻
咲きかへる道ぞめでたき咲きかへるみちぞめでたき

（小謡乳母御手より終り迄）

三番目　住吉詣　九月

シテ明石上　ツレ女侍紫上　ツレ男光源氏　ツレ女侍花散里　ワキ住吉神主

「是の摂州住吉の神主菊園の何某にてひ候も此頃都に於て譽並なき光源氏さる宿願の仔細あつて當社御參詣と仰せ出されひ程に、社人共を召出し社内をも清め其心得をなすべき由申付けばやと存しひ「小車の轅も續く都路の直に治る時世哉」「抑是の譽世に越え威光曇らぬ光源氏にておわします候も此君頼みを掛し、住吉の神に所願を滿てんとけふ思立つ旅衣薄き日影も白鳥の鳥羽の戀塚秋の山過ればいとゞ都の月の面影隔つる山崎や關戸の

宿も移來ぬ　拂のぬ塵の芥川猶名の笹原分け過ぎて　見渡せば薄霧まがふ其方より〳〵ほの見え初むる村紅葉是や交野に狩り暮れて春見し花の夫ならん猶行く先の渡邊や大江の岸による波も音立ち變へて住吉の浦わになるも程ぞなき〳〵「聞しに越えて愈有難き神の誓も潔き浦わの浪の瑞籬の久しき御代を守給へ　同上　扨の本の神の誓ひのおしなめて〳〵和光同塵結緣の御始八相成道の利物の果しなき迄國富み民を憐む御心を誰かの仰がざるべき〳〵「唯今の御參詣目出度ひ　惟光「さ

あらば祝詞を參らせられ候へ　ワキツヨク「いで〳〵祝詞を申さんと神主
御幣を捧げつゝ既に祝詞を申けり謹上再拜　敬白神慮をすゞし
めの神樂八人の八少女五人の神樂をのこ颯々の鈴の音ていとう
の皷の聲々に諷ふ榊葉の神歌幾久堅の天地開闢泰平諸人快樂福
壽圓滿に守らしめ給へや抑立る所の諸願成就皆令滿足有難や〳〵
同上ヨワク（糸縺子來し方より迄）「來し方の御願に猶も打添へて〳〵さも有難き神慮の納受も斯
やと感涙肝に銘じけり愈悦びの御盃神主に賜びければ折節御
供に河原の大臣の御例とて內より賜れる童隨身其時にお酌に立

ちて慰めの今樣朗詠す　子方上「一樹の陰や一河の水　地上「皆是他生の
緣といふ白柏子をぞ奏でける　舞　子方上「我見ても久くなりぬ住吉の
岸の姫松幾代經ぬらん　同上　千代万代の舞の袂〳〵愈廻る盃の
有明になる沖つ舟のほの〴〵明くる住吉の浦より遠の淡路島哀
同下　果なき詠め哉〳〵　シテツレ一聲「明石潟月待つ方に行く舟の浪靜なる浦
傳ひ　上歌同　舟出せし後の山の山颪〳〵　關吹き越えて行く程に須
磨の浦わもいつしかに跡の名殘もおしてるや難波入江に寄する
なる波のさながら白雪の津守の浦に着にけり〳〵　ツレ女上「松原の

深緑なる木陰より花紅葉を散せる如くなる色の衣々數々にの、
しりて詣づる人影のいかなる人にてあるやらん　惟光「是の都に光
君過にし須磨の御願はたしに詣て給ふといさ知らぬ人もありけ
る不思議さよ　「あら恥しや光君と聞くより胸うち騒ぎつゝい
とゞ心も上の空の　惟光「月日こそあれ今日此頃詣て來んとの
小謡「白露の　同上「玉襷かけも離れぬ宿世との〳〵思ひながらも中々
に此有様を餘所の見る目も恥しやさりとての浦波の歸らば中空
にならんも憂しやよしさらば難波の潟に舟とめて祓だに白波の
入江に舟を差寄する　地上「ふしぎやな有し明石の浦浪の立ちも歸
らぬ面影の夫かあらぬか舟影の忍ぶ文字摺誰やらん　シテ上「誰そと
の餘所に調めの中の緒の其音違はず逢見んの頼めを早く住吉の
岸に生ふてふ草ならん　源氏下「忘れ草〳〵生ふとだに聞く物なら
ば其かれこともあらじかし　地上「げに等閑に頼めおく其一言も今
の早　源氏「有し契のふにしあらば　同上「頓ての逢瀬も程あらじの心の
互に變らぬ影も盃の度重れば惟光も　惟光上「乳母御酌をこり〳〵の
酔ひに引かるゝ戯れの舞面はゆながらもうつり舞　舞「身を盡し。

懸ふるしるしに髪までも　廻り逢ける縁の深しな　「數なら
て難波の事もかひなきに何身を盡し思初めけん互の心を夕汐
満ち來て　入江の田鶴も聲惜まぬ程哀なる折から人目も包ま
ず逢見まほしくの思へ共早漕さ離れて行袖の露けさも昔に似た
る旅衣田簑の島も遠ざかるまゝに名殘もうしの車にめされて上
れば下るや稻舟の舟影もほの〳〵と明石の浦わの舟をし思ひの
別れかな

五番目　谷行　十月　前シテ母　子方松若　ワキ阿闍梨　ツレ同行小先達　後シテ鬼神（面ナシ）

ワキ詞

「是の今熊野の柳の木の坊に帥の阿闍梨と申山伏にてひ候も某弟子
を一人持ちてひが彼者の父空くなり母ばかりに添ひてひ又某の
近き間に嶺入を仕ひ程に暇乞の爲に唯今出京仕ひいかに案内申
ひ

「誰にて御入ひぞや師匠の御出にてひよ

「いかに松若何
とて久く寺への上り給ひぬぞ

「さんひ母御の風の心地に
てひ程に參らずひ

「言語道斷ゆめ〳〵さやうの事をも存ぜず
ひ先々某が參たる由御申ひへ

「いかに申ひ師匠の御出にてひ

「此方へと申ひへ　「此方へ御入ひへ　「久く參らずひ又松若申されひの風の心地の由承ひいかやうに御座ひそ　「風の心地の早苦からずひ御心安く思召されひへ　「偖のめでたうひ又近き間に嶺入を仕ひ程に御暇乞の爲に參てひ　「げにく嶺入とやらんの大事の行とこそ承てひへ偖松若も御供にてひか　「幼き者の供すべき道にてのなくひ　「偖のめでたう頓て御歸りひへ　「何事にてひぞ　「松若も嶺入の御供申さうずるにてひ　「いやいや唯今も母御に申ひ如く此道の難行捨身の行躰にて思ひもよらぬ事にて有ぞ其上母の風の心地を見捨つべきに非ずかたく　「いや母の風の心地にてひへば御新の爲に參らうずるにてひ　「さあらば此由を母御に申さうずるにてひ又參てひ松若嶺入の供せうずる由申されひ間母御の風の御心地といひ難行捨身の道と申かたく叶ふまじき由申てひへば御新の爲に供すべき由申されひいかゝひべき　「仰承ひ先の松若申す如く嶺入の御供申さん事こそ最望む處なれ共御身の

父におくれし日より唯獨子の只管に身に添ふ時だに見ぬひまの
露程だにも忘られず思ふ心を思へかし唯思止りひへ「仰の去御
事にてひへ共身の難行の道に出て母の現世を祈らんと思立ち
るばかりなりと　同下　かき口説きたる其氣色師匠も母も諸共に哀
れ孝行の深きや涙なるらん　「此上なれば力なしさらば師匠の
お供してとく〳〵歸給へや　于カ上　「歸るさの心を止めて出づる日も
頓て急ぐや足曳の大和路遠き思ひ哉　シテ上　「思ひを盡す手向にの
「つゞりの袖もきるべきに　同下　別の樣々の行末知れば餘所にのみ

見てや止みなん葛城や高間の山の峯の雲晴れぬの親の思ひ子の
名殘惜さをいかにせん〳〵　ワキ　「今日思立つ道の邊の〳〵　ツヨク　「斯て小童思ひの外峯入の姿山
伏の頭布篠懸苔の衣　上歌　山伏同　「たよりぞ深
き志唯孝行の神力に馬のあれ共徒歩に行くこの誰が爲ぞ宇治の
里都出でけふ三香の原泉川河風寒み千鳥鳴く聲こそ今日の夕べ
なれ〳〵　ふりさけ見れば春日なる〳〵三笠の山をさし過
て布留の神杉過がてに三輪の山もとよそに見て誰我庵と定めけ
ん峯の巖の苔衣かたしき初むる葛城の露こそ宿なりけれ〳〵

「急ぎ」ひ程に是の早一の室に着てひ暫く是に在らうずるにてひ

「承」ひ　子「いかに申すべき事のひ

の心地にてひ　ワキ「暫く此道に出で、左様の事をば申さぬ事にて

ひ夫の習ぬ旅の疲にてあるべしよく〳〵休みひへ　小先「松若殿

道より風の心地の由承」ひ先達に尋れ申さうずるにてひ　ツレ山伏「尤に

てひ　小先「松若殿風の心地と承」ひの何と御座ひぞ御心元なくひ

ワキ「さんひ是の習ぬ旅の疲にてありげにひ苦しからずひ　小先「偖の

御心安くひ　ツレ「いかに方々へ申ひ松若殿旅の疲の由仰せられひ

が以ての外に見え給ひてひ何とて大法の如く谷行に行ひ給ひひ

小先「げにく〳〵是の尤にてひさらば先達へ其由申さうずる

ぬぞ　小先「にてひいかに申ひ先に松若殿の御事を尋申してひへば旅の疲と

承」ひが今の早以ての外に見えさせ給ひてひ懼り多き申事にてひ

へ共昔よりの大法にてひへば谷行に行ひ申さうずる由皆々申さ

れひ　ワキ「何と松若を谷行に行のれうずるこひや　小先「さんひ

ワキ「大法の事にてひ程に是非をば申さずひさりながら彼者の心中餘

に不便にひへば大法の由を懇に申聞せうずるにてひ　小先「尤にてひ

ワキ
「いかに松若慥に聞け此道に出で、斯様に違例する者をば谷行と
て忽ち命を失ふ事是昔よりの大法也御身に代る者ならば何か命
の惜からん進退極りてゐ 千間
そ最望む處なれ共母の御歎の色夫こそ深き悲みなれまた假初も
他生の縁皆人々に御名殘こそ惜うゐへ 同下 何といひやる方もな
く皆聲を上げ涙に咽ぶ心ぞ哀なる 山伏同 ツヨク「斯て面々一同に哀れ悲き
ワキ
世の習ひ殊更是の大法の冥見私なき儘に谷行にこそ行ひけれ
和「先達も師弟の契の中なれば何といひやる方もなく唯くれ〳〵と

目も綾なく 同上 ヨワク泣涙せかれぬ道なれば身も諸共に兎も角も成ば
やと思ふさへ叶ぬ事ぞ悲き悲みの至て悲きの生別離の心也中々
死別ならば斯程の歎よも非じ 一切有爲の世の習如夢幻泡影
如露亦如電應作如是觀の心をも思知ずやさしもこの行者の道に
の出ながら火宅の門を去やらで猶安からぬ三界の親子恩愛の歎
に等かりけり 小先上 ツヨク「斯て時刻も移るとて皆面々に思切り邪見の劍
身を砕く心をなして彼人を瞼き谷に陷れ上に被ふや石瓦雨土塊
を動かせる心を傷め聲を上げ皆面々に泣居たり〳〵 小先 「早日

のたけてひ。急ぎ御立ち有うずるにてひ　ワキ「愚僧の罷立まじくひ
小角「先達の御立なくひひての我々の何と仕ひべき唯急いで御立ひへ
ワキ「先案じても御覧ひへ我等都に上り彼者の母にの何と申べきぞ所
詮病氣も歎も同じ事にてひへば我等をも谷行に行て給りひへ
小角「御歎尤にてひいかに方々へ申ひ先達の仰ひの病氣も歎も同じ事
なれば先達をも谷行に行ひ申せと仰ひ偖何と仕ひべき　ツレ「げに
〳〵御歎尤にてひ我々存ひの此年月の行徳もかやうの時にて社
ひへ開山役の優婆塞並に大聖不動明王のさつくにかけ松若殿の

御命を一度蘇生させ申うずるにてひ　小角「是の尤にてひいかに申
ひ皆々申されひの此年月の行徳も斯様の時にて社ひへ開山役の
優婆塞殊にの大聖不動明王のさつくにかけ松若殿の御命を蘇生
させ申うずる由皆々申されひ　ワキ「左様の事社聞ほしうひへ我等
も是にて祈念申うずるにてひ　ツレ山岡「偖も師匠の其歎理過ぐる有様
を見聞くも同じ心哉　「去ともに年月頼を掛くる大聖不動明王の
威力　「又の山神護王善神　ツレ同上「殊にの開山役の優婆塞　ツレ同上愛愍
納受垂給ひ　使者の鬼神の伎樂伎女を遣し助けおのしませ

同上　早笛　早打上舞　仕舞【　伎樂杖捨り迄り

伎樂鬼神は飛來り伎樂鬼神は飛來つて行者のお前に跪いて頭を傾け仰を受けて谷行に飛かけつて上に被へる土木磐石押倒し取拂つて上なる土をばやはら／＼と靜に返て彼小童を恙もなく抱上げ行者のお前に參らすれば行者は喜悅の色をなし慈悲の御手に髮を撫で善哉善哉孝行切なる心を感ずるぞとて歸らせ給へば伎樂も共に御前を拂つて嶮き道を分つ潛つ登るや高間の雲霧傳ふや葛城の人の目に社掛らされ共眞は渡せる岩橋を大峯掛て遙々と大峯掛て遙々と虛空を渡つて失せにけり

三番目 鬘物

半蔀

九月　前シテ 里女　後シテ 夕顏ノ精女　ワキ 僧

ワキ詞「是は都紫野雲林院に住ひする僧にて候。偖も我一夏の間花を立て候。早安居も過ぎ方になり候へば。色よき花を集め。花の供養を執り行はゞやと存候。敬つて白す立花供養の事。右非情草木たりと雖も。此花廣林に開けたり。豈心なしと云んや就中泥を出し蓮一乘妙典の題目たり。此結緣に引かれ。草木國土悉皆成佛道　シテ下「手に取ばたぶさに穢る立てながら。三世の佛に花奉る　ワキ詞「不思議やな今迄は。草花りようようとして見えつる中に。白き花の已獨り笑の眉を開け

たるのいかなる花を立てけるぞ　シテ
時の折なるになどかの夫と御覽ぜざる去ながら名の人めきて賤
き垣ほに懸りたれば知し召さぬの理り也是のタ顔の花にてゆ
ワキ上
「げにく」嘸とタ顔の花の主のいかなる人ぞ　シテ　「名乘ずと終にの
知しめさるべし我の此花の陰より參りたり　ワキ　「偖の此世に亡き
人の花の供養に逢のん爲か夫に就ても名乘給へ　シテ　「名のありな
がら亡き跡になりし昔の物語
一甲　上歌同
にの　五條あたりとタ顔のく」空目せしまに夢となり面影

ばかり亡き跡の立て花の陰に隱れけり〳〵　中入　ワキ　「有し數に隨つ
て五條あたりに來て見ればげにも昔の居座所さながら宿りもタ
顔の瓢箪屢空し草顔淵が巷に滋し　一甲　地上　「愁嘆の泉の聲
晴新に窓を穿つて去る　「雨原憲が樞を濕す
下歌同　後歌于　さらでも袖を濕すの盧山の雪の曙　上歌　窓頭に匂ふ朗月の〳〵
後歌同　琴瑟にあたり愁傷の秋の山物凄の氣色や　地上　「げに物凄き風の音
簀戸の竹垣有し世の夢の姿を見せ給へ菩提を深くとむらのん
シテ上　「山の端の心も知らて行くく月のの上の空にて絶えし跡の又いつか逢

甲　地上　ふべき。「山賤の垣ほ荒る共折〳〵の　「哀をかけよ撫子の
地上　「花の姿をまみへなば　「跡訪ふべきか　「なか〳〵に　「さらば
と思ひ夕顔の　草の半蔀押上げて立出づる御姿見るに涙の留
（巻仕舞切りてこその謡まで）らず　其頃源氏の中將と聞しの此夕顔の草枕唯假臥の夜もす
がら隣を聞けば三吉野や御嶽精進の御聲にて南無當來導師彌勒佛
とそ唱けろ今も尊きお供養に其時の思出られてそゞろに濡る袂
かな猶夫よりも忘ぬの源氏此宿を見初給ひし夕つ方惟光を招寄
せあの花折と宣へば白き扇のつまいたう焦したりしに此花を折

て參するシテ上　「源氏つく〳〵と御覽して打渡す遠方人に問とても。
夫其花と答ずの終に知でも有べきに逢に扇を手に觸る契の程の
嬉さ折々尋寄ならば定ぬ蛋の此宿の主を誰と白浪の寄邊の末を
頼んと一首を詠おのしますシテ折て社「折てこそ夫かとも見め黄
昏にノル「仄々見えし花の夕顔花の夕顔「終の宿りの知。
地上　せ申つ「常にのともらひシテ下「おのしませと「木綿附の鳥の音
「鐘も頻にも「告渡る東雲淺間にも成ぬべし明ぬ先にと夕顔の宿り。
明ぬ先にと夕顔の宿りの又半蔀の内に入て其儘夢とそ成にける

四番目
路二番

禪師曾我　七月

ツレ二人大第ハク「散りにし花の名殘には〳〵香ばかり送る嵐かな　「是の曾我

兄弟の人々に仕へ申す鬼王團三郎にてひ候も兄弟の人々の過ぎ

にし廿八日の夜井手の舘へ忍入り易々と敵を討ち其身も即座に

討れ給ひてひ我等兄弟も御供申ひへ共形見の品々を持ちて故郷

へ下れとの御事にてひ程にかひなき命助り御形見を持ち唯今故

郷へ下りひ　「使の泣きて歸し〳〵花を見捨る雁がね夫の

越路に歸る山是の名高き富士の根の煙見えたる東屋に歸りかれ

たる沁かな〳〵　「急ぎひ程に是の早曾我の里に着きてひ先

々案内を申さうずるにてひいかに案内申ひ鬼王團三郎が參たる

由夫々御申ひへ　「何鬼王團三郎と申すか人迄もあるまじ此方

へ來ひへ偖唯今の何の爲に來たるぞ　「さんひ面目もなき御使

に參てひ　「面目もなき使とのいかなる事にてあるやらん

「過ぎにし廿八日の夜井手の舘へ忍入り易々と敵を討ち御身も即

座に討れ給ひてひ又御形見の物を持ちて參てひ是々御覽ひへ

「祐經を討つ程ならば何とて落延びさりけるぞ　敵を討つの父

が爲母をば思ひぬ子供の形見怨しや　「げに〳〵御歎尤にてひ。

先箱根へ人を御登せひへ　「箱根と聞ば思出したり先々九上の

寺へ參ひへ　「げに〳〵禪師の御事よのう譬ひ御身の捨人なり

共　「水莖の　同上　筆の立てども覺れば涙な

がらにかきくれて九上の寺に送りけり〳〵　中入　「是の九上の禪

師にてひ我此間別行の仔細ひ間百座の護摩を焚ばやと存ひ

立像一セイツヨク「藤波の懸れる木々の梢をば嵐や寄せて散すらん　「是の伊藤の

九郎助宗也偖も過きにし廿八日の夜曾我兄弟の者井手の舘に忍ひ

入り親の敵を討ち其身も即座に討れてひ其弟に九上の禪師と申

てひを幼少の時より某養子として出家させ申ひをいかなる者の

申ひやらん君聞召し及ばせ給ひ急き搦捕つて參らせよとの御事

にてひ程に唯今九上の寺へ押寄せひ是の早九上の寺にてひ先々

案内を請はうずるにてひいかに案内申ひ伊藤の九郎助宗が參り

たり急いて門を開きひへ　「助宗の何の爲に御出にてひそ

ワキ「鎌倉殿より搦捕つて參れとの御事也とう〳〵出ひへ　「や助宗

の某が討手の爲なよし〳〵尋常に討死し御名を擧げて參らせん。

抑是の河津の三郎が末の子に九上の禪師 同上ニアル 墨染の下に忍辱の鎧
惡魔降伏の劍三尺の長刀指翳したり討つべき樣社なかりけれ
同上 ノラメ 心得給へ助宗と木戸を開いて切つて出れば手元に近づきあやま
ちすな射とれや射とれ梓弓疋田の小三郎が進でかゝるを長刀取
延べ法師の切るとて袈裟がけ也南無佛無慙やな シテ下ニアル 「縱へば沙門
の躰にて恩ひゆるすも事にこそよれ唯一命の勝負をせんと狩野
の源六其外若武者我も〳〵と懸りけれども禪師の騷がず打物合
せ爰やかしこに切立てられ門前の外まで引退けば是迄なりと長
刀投げ捨て護摩の壇上に走上り御本尊に向ひて阿毘羅吽欠につ
なぬかれ禮盤の上より落ちけるを生捕にせんとて利劍を奪ひ鎌
倉へこそ上せけれ鎌倉へこそ上せけれ

五番目　車僧　十二月　シテ大原坊　ワキ車僧

大ワキ第ツヨク「後の世かけて車僧〳〵常寝の眠いつ迄」降曇る空の小倉の峯の雪〳〵散るや嵯峨野の嵐山瀧の響も聲添へて重る雲の大井川筏の床の浮枕かたしく袖も白妙の空も程なく廻る日の西山本に着にけり〳〵暫く此所に車を立て四方の景色を眺うずるにてひ「いかに車僧」ワキ「何事ぞ」シテ「浮世をば」ワキ「浮世をば」シテ下「浮世をば何とか廻る車僧まだ輪の中に有とこそ見れ」ワキ下「浮世をば廻ぬものを車僧乗」ワキ同「も得るべき我あらばこそ」シテ「乗もうるべき

わがあらばこそと云のたそ　ワキ

山に云立つる　ワキ「人の愛宕の峯に住むな」シテ「僧お僧の住かの」ワキ「一所不住」シテ「車のいかに」ワキ「火宅の出車」シテ「廻れと」ワキ「廻ず」シテ「押せど」ワキ「押れず」シテ「引くも」ワキ「引れぬ」シテカ「車僧の」同上「三界無安猶如火宅をば出たる三の車僧哉廻るも直なる道也けりおう乗」シテ「得たり〳〵」※見聞く人心空なる雲水の〳〵ふかだつ空も凄しく嵐も聲々に愛宕山嶺どよむ迄響合ひて車路のなけれ共我住む方の愛宕山太郎坊が庵室に御入あれや車僧と呼のりて夕山

※暗に子絶り迄

の黒雲に乗て上りけり〳〵
人の跡だにもなしげに雪中に山路なし偖車輪ゆいかに車僧我程
貴き者非じと慢心の心路跡なからんや然ば無着法欲心に引くか
移るか車僧魔道にも心を寄せよ車僧
「佛法有ば世法あり」「煩悩有ば菩提あり」「佛有ば衆生もあり
「車僧有ば」「太郎坊の行者もあり」「祈ば祈べし行せば行徳も
劣ましごよ劣ましとよいさ車僧行較せん「いかに汝妨る共夫
に寄し爭じ我固より不増不減あら面白の時節やな「げに
「愛宕山樒が原に雪積り花摘む
「善悪二つの兩輪の如し

面白き時節ならば雪中に車を廻し嵯峨野の原にていざ遊ばん
「遊ばゝ遊べ糸遊の我心をば引れめや「などかの引かて有べき
と答を振上げ車を打つ「おう車を打たば行くべきか牛を打た
ば行くべしや「げに〳〵車の心なし偖牛を打んも有ばこそ
「愚や汝人牛の道見えたる牛をばなど打たぬ「見えたる牛との
偖いかにそも人牛の「打共行かじ「偖お僧の打たば行可か
「中々の事いて〳〵去ば露地の白牛を打て見せんと拂子を上て虚
空を打てば不思議やな此車の〳〵搖廻りて今迄の足弱車

と見えつるが牛もなく人も引かぬにやすく／＼と遣かけて飛ぶ車とぞ成たりける

地上ロンギ「小車の山の陰野の道すがら法の道の邊遊行して貴賤の利益なすとかや

淨仕舞終り迄

シテ上「所から爰ハ浮世の嵯峨なれや雪の古道跡深き車の轍ハ足引の大雪にハよも行じ　地上「げに雪山の道也と法の車路平に　シテ「行か行ぬか此原の　地「草の小車雨添て　シテ「打て共行ず　地「止れば進む　シテ「此車の　地下「法の力とて嵯峨小倉大井嵐の山河を飛翔つて眩惑すれ共騒がばこそ眞に奇特の車僧哉。あら貴や恐やと魔性を和げ大天狗ハ合掌してこそ失にけれ

三番目
略脇能

吉野天人　三月

前シテ 里女　後シテ 天女
ワキ 都人

ワキ次第ツヨク「花の雲路を知るべにて／＼吉野の奥を尋ねん

ワキ詞「是ハ都方に住居する者にて候。偖も我春に成候へば爰彼所の花を一見仕候。中にも千本の櫻を年々に眺め候。此千本の櫻ハ三吉野の種取りし花と承及び候間若き人々をも伴ひ此度ハ和州に下向仕候。

道行「此春ハ殊に櫻の花心／＼色香に染むや深緑糸撚かけて青柳の露も亂るゝ春雨の夜降りけるか花色の朝じめりして氣色立つ吉野の山に着きにけり／＼

ワキ詞「急ぎ候程に是ハ早吉野の山に着て候。

御覽ひへ峯も尾上も花にてひ猶々奥深く分入らばやと思ひひ

シテ女「のう〳〵あれなる人々の何事を仰せひぞ　ワキ「さんび是の都の者にてひが此三吉野の花を承及び始て此山に分入てひ又見申せばやことなき御姿なるが此山中に入らせ給ふのいかなる人にてましますぞ　シテ「是の此あたりに住む者なるが春立つ山に日を送りさながら花を友として山野に暮すばかり也　ワキ「げにく花の友人の他生の縁と云ひながら我等も同じ其心　上歌同　ワキ「所も山路の弥小謡「友なれや見もせぬ人や花の友〳〵知るも知らぬも花の陰に相宿して諸人のいつしか馴て花衣の袖ふれて木の本に立寄りいざや眺めんげにや花の本に歸ん事を忘るゝの美景によりて花心馴れ〳〵初て眺んいざく馴て眺ん　ワキ「いかに申べき事のひ。斯様に家路を忘れ花を眺給ふ事愈不審にこそひへ　シテ「げに御不審の御理今の何をか包むべき眞の我の天人なるが花に引れて來たり今宵の爰に旅居して信心を致給ふならば其古の五節の舞。小忌の衣の羽袖を返し月の夜遊を見せ申さん暫く爰待給へと夕映匂ふ花の陰〳〵月の夜遊を待給へ少女の姿現して必ず爰

に來らんと迦陵頻伽の聲ばかり雲に殘て失せにけり〱 中入

ワキ上歌 ツヨク「ふしぎや虛空に音樂聞え異香薰て花降れり是治れる御代とかや

同上 ヨワク 下リハ又出端 いひもあへねば雲の上〱琵琶琴和琴笙篳篥鉦鼓羯鼓や糸竹

の聲澄渡る春風の天つ少女の羽袖を返し花に戯れ舞ふとかや

天女舞 樂仕舞 少女より起り終り 同上 少女は幾度君が代を〱撫し巖も盡せぬや春の花の梢に舞遊

び飛上り飛下る實も上なき君の惠治る國の天津風雲の通路吹閉

るや少女の姿留る春の霞も棚引三吉野の吉野の山櫻移ふと見え

しが又咲花の雲に乘又咲花の雲に乘て行へも知ずぞ成にける

四番目 略二番

大佛供養　九月

シテ 惡七兵衞景淸　ツレ 從者
ツレ 同人ノ母　ワキ 從者
ツレ 源賴朝

次第 シテ ヨワク「忘れは草の名に聞きて〱忍ぶや我身なるらん シテ詞「是は平家

の侍惡七兵衞景淸にて候我此間は西國の方に候ひしが宿願の仔

細あるにより此程罷上り淸水に一七日參籠申て候又承り候へば南

都大佛供養の由申候某も若草邊に母を一人持ちて候程に斯様の

折節貴賤に紛れ向顏の爲唯今南都へと急ぎ候 哀れやげに古へ

はさしも榮えし花紅葉の壽永の秋のいかなれば思はぬ風に誘れ

てさしも馴れにし都の空引かへ鄙のうき住居 下歌 繫がぬ船のか

ひもなく弓矢の家に生來て　上歌
三笠の森のかげ頼む〳〵其幣
木の長へて未だ此世の御住居神も教への牡鹿鳴く春日の里に着
きにけり〳〵　急ぎひ程に南都若草邊に着てひ此あたりに
て御行へを尋ればやと存ひ　母「偖も我子の景清の此程いづくに
有やらん南無や三世の諸佛我子の景清に再び逢せてたび給へ
シテ詞
「いかに案内申ひ　母「我子の聲と聞くよりも覺えず扉に立出て、
景清なるかと悦べば　シテ「暫くあたりに人もやひらん某が名をば
仰せられましいにてひ　母「先此方へ渡りひへ偖此程のいづくに

ひひつるぞ　シテ「さんひ西國の方にひひしが宿願の仔細有により。
都に上り清水に參籠申ひ處に大佛供養の由承ひ程に斯樣の折節
貴賤に紛れ御音信の爲に參りてひ　母「偖の嬉くも來給ひてひ又
尋れ申べき事のひつゝまず申べきか　シテ「是の今めかしき仰哉何
事にてもひへ申上げうずるにてひ　母「眞や人の申の賴朝を狙ひ
申すと聞及びてひが眞にてひか　シテ「是の思ひも寄らぬ仰にてひ
さりながら西海にて亡給ひし御一門の御弔ひにもなるべきかと。
思へば狙ひ申也　母「申こころのさる事なれ共明日をも知らぬ老

の身の果をも見届け給へかし　シテ次上
　　母
さずして「風に漂ふ浮舟の教經の御供申
　シテ
「起きもせず　同上之ヲ　寝もせで夜半を明
しかれ此身を隠すかひもなく景清が心のうち母も哀と思召せ、
上歌　小鼓ノ一門よ
一門の船のうち一門の船のうちに肩を比べ膝をくみて所せく住
む月の景清の誰よりも御座船に無て叶ふまじ一類其以下武略様
々に多けれど名をとり楯の船にのせ主従隔てなかりしのさも羨
れたりし身の現隣も老いぬれば駑馬に劣るが如く也　「早夜の
明けてひ程に御暇申ひ
　　母
「搆へて御身をよく〳〵愼みて重れて

來給ふべし　シテ上
「げに有難き母の慈悲御言葉の末も頼もしき
同上　地
（カヽ）はやその森の雨露の〳〵梢も濡す我袖をしほりかねたる涙哉
いつしか親心悲む母の門送景清も跡を見返りて涙と共に別れ
けり〳〵「世に隠れなき大伽藍佛の供養急ぐ也　「抑是の
源家の官軍右大將頼朝との我事也　「忝なくも此御寺の聖武皇
帝の御建立大佛殿にておのしますに　立衆上
「又此君の御威光今此御寺
にあひにあふ　立衆上
「大伽藍の御供養〳〵光り輝く春の日の三笠
の山に影高き法の御聲の様々に供養をなすぞ有難き〳〵

シテ詞「面白や奈良の都の時めきて色々飾る物詣我の夫にの引きかへて。敵を討たん謀を思ふ心の巳が名の悪七兵衛景清とよそにも夫と人やもし白張浄衣に立烏帽子げに我ながら思のざる姿に今の楢の葉の時雨降り置く天が下に身を隠すべき便なき憂き身の果ぞ哀なる宮人の姿を暫し狩衣 地上「けふばかりこそ翁さび 同上「人なとがめそ神だにも 同上「塵に交る宮寺の供養の場に立ち出づるワキ詞「こは何者なればや御前間近く参るぞ。そこ退きひへ シテ「是の春日の御奴なるがけふの佛の御供養場を清めの役人なるを何しに咎めの隔てと聞く時の佛も同一躰其上貴賤の事なるに何とて撰み給ふべき ワキ詞「つゝむとすれど神のなほ君を守りの御威光シテ詞「現れけるか白張の ワキ詞「脇より見ゆる具足の金物 シテ詞「光を放つワキ詞「打ち物の 同上「鞘つまりたる言葉の末名乗れ〳〵と責めければ顕れたりと思ひつゝさらぬ様にて立帰り又人影に隠れけり

ワキ詞「言語道断の事唯今のものをいかなる者ぞと存てひへば平家の侍悪七兵衛景清にてひ正しく我君を狙ひ申と存ひ程に警固の者に給ふらん ワキ詞「春日祭にあらばこそ是の佛の御供養 シテ「のう水波

申付け討取らせばやと存候　いかにやいかに警固の兵確に聞け唯今見えしじれ者を早討つ取つて参らせよとさも高聲に下知すれば　「畏つて候とて豫て用意の警固の兵皆一同に立騒ぐ

シテ詞

「其時景清又立出で、思ふやう爰立退きては弓矢の恥辱となるべきなれば今一太刀打合ひて重て時節を待つべしと大音あげて呼はりけり　抑是は平家の侍悪七兵衛景清と　名のりもあへずあざ丸を　するりと抜持ち立向ひ大勢にわつて入れば　さしも固めし警固なれども四方へぱつとぞ逃げにける中に若武

者進み出で、走りかゝつてちやうと切ればひらりと飛んで手もとに寄り忽ち勝負を見せにけり今は景清此迄なりと少し祈念を致しつゝ彼あざ丸をさしかざせば霧立ち隠すや春日山茂みに飛入り落けるが又こそ時節を待つべけれと虚空に聲して失せにけり ❀

四番目　忠信　シテ 佐藤忠信　ワキ 伊勢三郎　ツレ 源義経　ツレ 従者(囃ナシ)　立衆 法師武者

ワキ詞「是の判官殿の御内に伊勢の三郎義盛にてひ候も我君判官殿の此吉野を頼み御座ひ處に衆徒の詮議變り今夜夜討すべき事一定のやうに申ひ間此事申上ばやと存ひいかに申上ひ義盛が參てひ

判官「此方へ來りひへ　ワキ「畏つてひ　「候唯今の何の爲に來てあるぞ

ワキ「さんひ唯今參る事餘の儀にあらず當山の者共心變し今夜夜討をすべき事一定のように申ひ間此事申上くべき爲に參りてひ

判官「是の眞にてあるか　ワキ「さんひ　判官「口惜や我幾ばくの難を遁れ命を重ずる事も朝敵の盧名を晴さん其爲也夫に當山の衆徒夜討すべきを告知する條是ひとへに天の御加護也兎に角に我の夜に入り此所を開くべし誰か一人留り防ぎ矢を射其後命を全うして路次にて追つ付くべき者やある義盛計ひへ　ワキ「御諚畏つて承ひ去ながら某を始め皆いづく迄も御供とこそ存ひべけれ恐れながら誰にても召出されて直に仰付けられよかしと存ひ　判官「夫こそ我等が思ふ所なれ去ば佐藤忠信を此方へと申ひへ　ワキ「畏つてひ

いかに此家の内に忠信のわたりひか　シテ「誰にてわたりひぞ

「君よりの御使に義盛が參じてゐ。少し御用の事ゐへば。御參あれとの御事にてゐ　「畏つてゐ　「忠信參てゐ　「いかに忠信。當山の者共。心變し。今夜夜討すべき事一定の樣に申ゐ。兎に角に我の夜に入り此所を開くべし。汝一人留り防ぎ矢を射其後命を全うして。路次にて頓て追つ付きゐへ　「御諚畏つて承ゐ。去ながら某が事のいつく迄も御供に召具せられゐひて。餘人に仰付けられゐへも。し辭し申す者あらば。其時御意をば背き申まじくゐ　「いや汝を賴む上の。とかくの事の有まじくゐ　「御意をばいかで背くべき

然も一人撰れ申し。防矢仕れとの御諚。弓矢取つての面目なれば。忝うこそゐへとよ。去ながら我君を始め奉り皆人々に御名殘こそ惜うゐへ　同上　不覺の涙を抑へて。御前を立つ皆哀にぞ覺ゆる。かくての時刻移るとて。我君を始め奉り門前を出で。間道より。ひそかに忍び出て給へば　「忠信暫しの御供し。御暇申し留れば。かまへて命を全うして御供に參らず。不忠なるべし心得よと涙を流させ給へば忝けなしと忠信の唯一人留る心の便も涙なるらん。

法師武蔵

「いかに此坊中へ案内申ひ

いかなる者ぞ　法師　「わりなく頼朝よりの仰に従ひ當山の者共判官殿の御迎ひに參たりとう〳〵出てさせ給ふべし　「あらはかくしや忝くも我君に思ひかゝらんとやよし先軍の試に此矢一筋受けて見よと　同上　高櫓にかけ走り上り〳〵中差取つて打交ひよつ引て放つ矢に眞先がけたる武者數多一矢にどうと轉べば目を驚し肝を消して一度にどつとぞ譽めたりける　同上　刀を拔持ちて弓手の脇より右手の脇へ一文字に切るとぞ見えしが虚腹

切て櫓より後の谷にぞ轉落つ　同上　敵の兵是を見てよれや者共首を取れと一度にばつと寄り打破り亂入り呻き叫で震動すれば

「其隙に忠信の〳〵豫て用意の小太刀おつとり密に忍び出茨からたち分つ潛りつ慕ひ行を怪むる者有てあれのいかにと呼り掛ければ地に伏隱れ闇を便に忍ばんとするを遁すまじとて走掛つて拂ふと見えしが眞向わられて二になれば續く兵大太刀翳し打つ太刀を受流し諸膝掛て切放し通つて今の斯よと遁の谷を蝶鳥の如くに飛翔り蝶鳥の如くに飛翔つて都をさしてぞ急ぎける

五番目　烏帽子折　九月

（ワキ第二人ツヨク）「末も凍の旅衣〳〵日も遥々と急ぐらん　「是の三條の吉次信

高にてひ我此程數の寶を集め弟にてひ吉六を伴ひ只今東へ下ひ。

いかに吉六高荷共を集め東へ下らうずるにてひ　「委細心得申

ひ頓て御立あらうずるにてひ　「のう〳〵あれなる旅人奥へ御

下ひのば御供申ひのん　「易き間の御事にてひへ共御姿を見申

せば師匠の手を離れ給ひたる人と見え申てひ程に思ひも寄ぬ事

にてひ　「いや我にの父もなく母もなし師匠の勘當蒙りたれば。

唯伴ひて行き給へ　「此上の辭退申に及ばずして此御笠を參す

れば　「牛若此笠おつ取つてけふぞ始て憂き旅に　粟田口松

坂や四の宮河原逢坂の關路の駒の後に立ていつしか商人の主

從となるぞ悲き　葉屋の床の古へ〳〵都の外の憂き住居さ

こそのと今思ひ粟津の原を打過ぎて駒もとゝろと踏鳴らし勢田

の長橋打渡り野路の夕露守山の下葉色照る日の影も傾くに向ふ

夕月夜鏡の宿に着きにけり〳〵　「急ぎひ程に鏡の宿に着き

てひ此所に御休あらうずるにてひ　「唯今の早打をよく〳〵聞

きひへば。我等が身の上にてひ。此儘にて。の叶ふまじ。急ぎ髪を切り烏帽子を着東男に身をやつして下らばやと思ひひいかに此内へ

案内申ひ　「誰にて渡ひぞ　「烏帽子の所望に参ひ　「何と烏帽子の御所望とひや夜中の事にてひ程に明日折て参らせうずるにてひ　「急ぎの旅にてひ程に今宵折て賜りひへ　「去ば折て参せうずるにてひ先此方へ御入ひへ。俗烏帽子の何番に折ひべきにこそ。今の平家一統の世にてひ程に左折の思ひも寄ぬ事にてひ

「三番の左折に折て賜りひへ　「是の仰にてひへ共夫の源家の時

「仰の尤にてひへ共思ふ仔細のひ間唯折て賜りひへ　「幼き人の御事にてひ程に折て参せうずるにてひ此左折の烏帽子に付て嘉例めでたき物語のひ語つて聞せ申さうずるにてひ　「去ば御物語りひへ　「偖も某が先祖にてひ者の元の三條烏丸にひひしよないで其頃の八幡太郎義家。安部の貞任宗任を御追罰あつて程なく都に御上洛あり某が先祖にてひ者に此左折の烏帽子を折らせられ君に御出仕ありし時帝なのめに思召し其時の御恩賞に奥陸奥の國を賜つてひ我等も又其如く嘉例めでたき烏帽子折にてひ

へば此烏帽子を召されて程なく御代に　同下　出羽の國の守か陸奥の國の守にかならせ給ひん御果報あつて代に出で給ひん時祝言申し烏帽子折と召されてめでたう引出物賜ばせ給へや哀れ何事も昔なりけり御烏帽子の左折の其盛源平兩家の繁昌花ならば梅と櫻木四季ならば春秋月雪の眺何れぞと爭ひしにやいつのまにか保元の其以後の平家一統の代と成ぬるぞ悲きよし夫とても報あらば世變り時來りなり知る烏帽子櫻の花咲かん頃を待ち給へ　シテ上歌小謡斯様に祝ひつゝ程なく烏帽子折立てゝ華かに三色組の烏帽子懸

緒取出し氣高く結ひ濟し召されて御覽ひへとてお髮の上に打置き立退きて見れば天晴御器量や是ぞ弓矢の大將と申共不足よもあらじ　シテ同　「日本一烏帽子が似合ひ申てひ　牛若　「去ば此刀を參らせうずるにてひ　「いやく烏帽子の代の定りてひ程に思ひもよらずひ　牛若　「唯御取ひへ　「去ば賜らうずるにてひさこそ妻にてひ者の悦びひんいかに渡ひか　ツレ女　「何事にてひぞ　「幼き人の烏帽子の御所望と仰せひ程に折て參せてひへば此刀を賜りてひ何ぼう見事なる代にてひなきかよく〳〵見ひへ荒ふしぎや斯様

の事をば天の與ふる事との思給のてさめ〴〵と落涙の何事にて
ひぞ　ツレ女上「恥しや申さんとすれば言の葉より先立つの涙なり
今の何をか包むべき是の野間の内海にて果給ひし鎌田兵衛正清
の妹也常磐腹にの三男牛若子生れさせ給ひし時頭の殿より此御
腰の物を御守刀にとて參らさせ給ひし其御使をばわらの申てさ
むらふ也痛のしや世が世にてましまさばかく憂目をば見ましき
物をあら淺ましやひ　シテ同「何と鎌田兵衛正清の妹と仰せひか
ツレ女「さんひ　シテ「言語道斷此年月添ひ參すれ共今ならでの承ずひ偖此
御腰の物をしかと見知り申されてひか　ツレ女「こんねんどうと申す
シテ「げにく承及びたる御腰の物にてひ偖の鞍
馬の寺に御座ひひし牛若殿にて御座ひなさあらば追つつき此御
腰の物を參せひべしお事も渡ひへや未だ是に御座ひよ是に女の
ひか此御腰の物を見知りたる由申ひ程に召上られて給りひへ
牛若「ふしさやな行へも知らぬ田舍人の我に情の深きぞや　ツレ二人「人違な
らばお許あれ鞍馬の少人牛若君と見奉りてひ也　牛若「實今思ひ出
したりもし正清がゆかりの者か　ツレ女「御目の程のかしこさよわら

ツレ女　牛若

ゆゝ鎌田が妹に　「あこやの前か

牛若　同上

我こそゆ　身のなる果の牛若丸人がひもなき今の身を語れば

ロンギ地上

主従と知るゝ事ぞふしぎなる　早東雲も明行けば

二人

「月も名殘の影うつる鏡の宿を立出づる

「痛のしの御事やさしも名高き御身の商人と伴ひて旅をしかまの徒歩はだし目も當られぬ

牛若

御風情　「時代に變る習とて世の爲身をば捨衣怨と更に思のし

シテ下

「東路のおはなむけと思召されひへとて　同上　此御腰の物を強て參せ上げければ力なしとて請取り我もしも世に出ならば思ひ知べ

しさらばとて商人と伴ひ憂き旅にやつれはてたる美濃の國赤坂の宿に着きにけり

ワキ問

「急ぎひ程に赤坂の宿に着きてひ

吉六

かに吉六此所に宿を取ひへ

吉六

「畏つてひ

ワキ

「是の何と仕ひべき

吉六

「我等も是非を辨へずひ

牛若

「面々の何事を仰せひぞ

ワキ

「さんひ我

等此所に泊りひを此あたりの惡黨共聞付け今夜夜討に討たうず

牛若

ろ由申ひ程に左樣の談合仕ひ

ワキ

「假大勢ありとても表に立ん兵

を五十騎ばかり切伏すならばやの

牛若

か退かぬ事のひまじ

ワキ

「是の

頼もしき事を仰ひもの哉惡皆頼みひ

牛若

「面々の武具して待給へ

我の大手に向ふべしと　「夕べも過ぎて鞍馬山〳〵年月習ひ
し兵法の術を今こそ現し衣の妻戸を開きて沖つ白波の打入る
を遅しと待居たり〳〵　「寄せかけて打つ白波の音高く関を
作つて騒ぎけり　「いかに若者共　「御前にゐ　「大手がくわ
つと開けたるの内の風ばし早いか　「さんぴ内の風早〳〵して或
の討れ。又の重手負ひたると申ひ　「ふしぎやな内にの吉次兄弟
ならでの、あるまじきが。偖何者かある　「投松明の影より見ひへ
ば年の程十二三ばかりなる幼き者。小太刀にて切つて廻ひの。さな

がら蝶鳥の如くなる由申ひ　「偖摺針太郎兄弟の　「是の火振
の親方として。一番に切つて入りしを例の小男渡合ひ。兄弟の者の細
首を。唯一討に打落したる由申ひ　「えい〳〵何と何と彼者兄弟
の餘の者五十騎百騎にの增さうずるものをあゝ斬つたり斬つた
り彼奴の曲者よ　「高瀬の四郎の是を見て。今夜の夜討悪しかり
なんとや思ひけん。手勢七十騎にて退て歸てひ　「彼奴の今に始
ぬ臆病者偖松明の占手のいかに　「一の松明の斬つて落し二の
松明の踏消し三の取つて投返してひが三つが三つながら消てひ。

「夫こそ大事よ夫松明の占手といつぱ一の松明の軍神二の松明の
時の運三の我等が命なるに三が三ながら消ゆるならば今夜の夜
討の儕よな「御諚の如く此儘にて鬼神にても堪るましくゆ。
唯退いて御歸ひへ「げに〳〵盜も命のありてこそいざ退いて
歸らう「尤にてひ「いや熊坂の張範が今夜の夜討を仕損じ
て。いづくに面を向くべきぞ唯攻入れや若者共と大音上げて呼り
けり「関を作つて切つて入りけりく。あら物々しや已れらよ。
先に手並の知つらん夫にもこりず打入るか八幡も御知見

あれ一人も助てやらじものをと小口に立つてぞ待懸けたる
同上
熊坂の張範六十三〳〵今宵最期の夜討せんと鉄扉をふんぬぎ
捨て五尺三寸の大太刀をするりと抜いて打かたげ大鳥歩にゆら
り〳〵と歩み出でたる有様のいかなる天魔鬼神も面をむくべき
様ぞなき　同上　あらはかく〳〵しや盜人よ〳〵めだれ顔なる夜討
の共我にの叶のじものをとて透間あらせず切つて懸る熊坂
も大太刀遣の曲者なればさそくをつかつて十方切八方拂や腰車
破坂の返し風まくり劒ふらしや獅子の歯がみ紅葉重れ花重れ三

(二百九十) しのぎ 刃の高き處

つ頭より火を出してしのぎを削つて戰ひしが秘術を盡す大太刀も御曹司の小太刀に切立てられ受太刀になつてぞ見えたりける

同上 打物業にて叶ふまじ〱組んで力の勝負せんとて太刀投捨て大手を擴げて飛んでかゝるを背けて諸膝薙ぎ給へば切られてかつぱと轉びけるが起上らんとてつゝ立つ所を眞向よりも割りつけられて一人と見えつる熊坂の張範も二つになつてぞ失せにける

五番目

大瓶猩々

九月

前シテ 童子　後シテ 猩々　ワキ かうふう　ツレ 猩々

ワキ詞「是は唐土かねきん山の麓にかうふうと申す民にて候我親に孝あるにより次第〱に富貴の家と罷成て候又此間いづく共知らず童子數多來り某が酒を買取り候けふも來りて候はゞいかなる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候

(海)

シテ 一セイ「わたづみのそこ共知らぬ波間より現れ出づる日影かな

ワキ詞「けふの市人の何とて遲く來給ふぞ

シテ「嬉やさらばと内に入りいつもの酒を愛しけり

上歌 同「琴詩酒と聞くも隔てぬ友人の〱いつも變らぬ酒功賛に酒を愛せし來方の。

人の心に引きかへて是の琴にも盃詩を作るにも盃唯酒のみの友
ばかり恥しやさこそげに市人の我を笑ふらん※「此程のいづく
の人共辨へずけふの御名をなのりおのしませ「今の何をか包
むべき是の潯陽の江に年久しき猩々といへる者なるが御身親に
孝あるにより天の憐み深ければ泉の壺を與へん也疑ひ給ふなか
うふうと（同上）※夕べの空も近ければ〳〵暇申してさらばとて行
くかと見ればさにぬりの面も赤く様變りて市人に立紛れて跡も
見えず成にけり跡をも見せず成にけり（同上）御酒と聞く〳〵名

※謡曲猩々終り近

も冷しく秋の來て暖め酒と菊月の頃も早紅葉の早色づくか一重
山薄きもみぢ葉色々の菊の盃据ゑ置き秋の夜深く待ちけそに
二人下「ふしぎや此友の〳〵來らぬの覺束な沖に向ひて我友のなど遲
なのり給ふぞや急ぎ給へ友人（同上）ショク又猩々の現れ出て〳〵彼か
うふうに妙なる泉を與へんとて波間を分けて潯陽の江の汀も近
く現れたり（同上）頃の秋の夜月面白く〳〵汀の波も更け靜りて
數多の猩々大瓶に上り泉の口をとるとぞ見えしが涌上り涌流れ
汲めども〳〵盡きせぬ泉何れも戲れ舞ふとかや（謡）「菊の露積り

※仕舞終り迄 て盡きぬ。此泉 同下 盡きせぬ宿に ※「返し授け置き 同上 是迄なりや。醉ひ伏す夢の覺むると思へば又起上り命長柄の把杓の酒を道俗男女に殘さず勸めもとの泉に納りければ何れも〳〵足もとはよろ〳〵よろ〳〵と繰言しげ〳〵千秋万ぜい君千代までと千秋萬歳君千代迄と榮うる御代こそめでたけれ※

脇能 鶴龜 正月

シテ 皇帝 ワキ 大臣 （鶴 龜 （謡ひなし））

シテ サシ ツロク 「夫青陽の春になれば四季の節會の事始 地 「不老門にて日月の光を天子の叡覽にて シテ 「百官卿相に至る迄袖を連ね踵を接で 地 「其數一億百餘人 シテ 「拜を進る萬戸の聲 地 「一同に拜する其音の シテ 「天に響て夥し ※小謡 地 上歌 同 ※庭の砂の金銀の〳〵玉を連て敷妙の五百重の錦や瑠璃の扉硨磲の行桁瑪瑙の橋池の汀の鶴龜の蓬萊山もよそならず。君の惠ぞ有難き〳〵 ワキ 詞 ※「いかに奏聞申べき事の。毎年の嘉例の如く鶴龜を舞せられ。其後月宮殿にて舞樂を奏られうずるにてや

地上シテ

「兎も角も計ひひへ「龜の萬年の齡を經鶴も千代をや重ぬらん

同上 舞打上 千代の例の數々に〳〵何を引かまし姫小松の綠の龜も舞遊べ

巡リ終リ 幾千代よ

ば月頂の鶴も一千年の齡を君に授奉り庭上に參向申ければ君も

御感の餘にや舞樂を奏て舞給ふ 樂打上 月宮殿の白衣の袂〳〵の

色々妙なる花の袖秋の時雨の紅葉の葉袖冬の汙行く雪の袂を飜

す衣も薄紫の雲の上人の舞樂の聲々に霓裳羽衣の曲をなせば山

河草木國土豐に千代萬代と舞給へば官人駕輿丁御輿を速め君の

齡も長生殿に君の齡も長生殿に遲御成こそ目出度けれ※

ワキ第次ツヨク「今日早鞆の神祭〳〵盡きせぬ御代ぞめでたき　「抑是の長門

前シテ漁人　後シテ龍神

前ツレ海人　後ツレ天女

ワキ早鞆神職

國早鞆の明神に仕へ申神職の者也偖も當社に於て御祭樣々御座

ひ中にも十二月晦日の御神事をば和布刈の御神事と申ひ今夜寅

の時に至つて龍神潮を守護し波四方に退いて平々たり其時神主

海中に入つて水底の和布を刈り神前に供へ申ひ殊に當年ゆふし

ぎの奇瑞御座ひ間愈信心を致し御神事を執行ひばやと存じひ

有難や今日早鞆の神の祭年の極めの御祭といつぱ又新玉の年の

始めを祝ふ心の君がため

上歌

春の野に出でゝ摘む若菜〳〵生

行末の程もなく年の暮るれど緑なる和布刈のけふの神祭こゝろ

を致し様々に君の恵みを祈るなり〳〵「天地の開けし御代

の久堅の神と君との御影かな　二句」けふに廻るも早鞆の　共に暮

下甲上　下甲上

れ行く年なれや　「有難や夫秋津洲のうちに於て神所の御祭様

々なれ共　此早鞆の神祭世界わたづみ隔てなくて藻藻の禮奠感

應のみるめ浮めの花も咲く波をかざしの手向草塵に交る神心誓

ひにもるゝ方もなし　歩みを運ぶ此神にいざ結縁をなさうよ

上歌

所の早鞆の〳〵ゆきゝの舟も梶をたえ數々の捧物あまのしわ

ざに至る迄かひあるべしや心ざし夫こそ花の手向なれ〳〵※

ワキ上

「ふしぎやな夕影過ぐる神の御前に手向を捧ぐる人影のそもやい

かなる人やらん　ツレ「是の賤しきあま少女の數にのあらぬうき身

なるが手向を捧ぐるばかり也　シテ「我の又年經て住める此浦の漁

翁の罪を恐るゝ故賤しき者の輕き身を浮かめん爲にてひなり

ワキ「中々なれやうろくづ迄も誓ひに洩れぬ此浦の　シテ「あまの漁火焦

（二百九十九）

（ロンリ）

る共　二人和光の影の曇りなく　同下　明かなれや天地の開けし神代の

如くにてすなほなるべき人心いやましの瑞驗現れにけるぞあり

上歌同 がたきや ※海原(カナバル)や博多(カタ)の海も程近く汐引島も見え渡る早

鞆の友千鳥沖(オキ)の鷗も群れ立つや春秋の雲居の雁も留め得ぬたが

(タマヅサ玉章) たまづさの門司の關守と詠みし心もことわりや ※ツヨク夫地

神第四の御代ほゝでみの尊豐玉姫と契をなし海陸の隔てなかり

地堤子終り迄 しに ※「其御産の時豐玉姫尊に向ひ宣のく産期に於て我姿を敢

て見給ふ事勿れと御約諾のみことのり互に固く誓ひたまふ

クセ下 然れ共時至りさすがに御氣色いぶかしく覺しけるかとよかいま

見えさせ給しないと淺ましと恨みかこち長く海路の通ひをたち

隱す波の玉の御子を捨てつゝ豐玉姫の龍宮に入給ふ其後潮さし

ヒテ上 ひきの朝暮の時の有ながら人畜類の生を背き境をさかりにき

「然れば神代の昔より此早鞆の神祭神慮普き誓ひなれや上の非想

の雲の上下の下界の龍神迄渦仰の心中眞に深き蒼海を陸地にな

して此國の長門の通ひ隔もなき海藏の御寶も心の如く成べし

地上 ロンキ「實や心の如くにて〳〵此結緣も樣々の人の願ひのなかるべき

(三ツレ上) (一百) 「今の何をか包むべき我住む方の久堅の 上地 「天つ少女の雲の袖

シテ上「かざしの花の手向草　地上「色こそ變れ　シテ上「わたづみの　地上「花は波
路の底よりも龍宮の捧物天地共に渦仰の天つ少女の雲にのれば、
翁の老の波に隠れ入給ひけりや　隠れ入らせ給ひけり　同上ノルキリ太鼓汀に神
幸なり給へば〳〵虚空に音樂松風に和して皎月てらし異香薫
仕舞終り迄
なり潮も光り鳴動して沖より龍神現れたり　早笛※「龍神即ち現れて、
シテ　地上
「和布刈の所の水底を穿ち　「拂ふや汐瀬にこゆるぎ
同下
和布刈の時至り虎嘯くや風早鞆の龍吟ずれば雲起り雨と
同上
の磯菜つむ　シテ下「めざし濡すな沖に居れ浪　沖に居れ波と夕汐
を退け屏風を立てたる如くにわかれて海底の砂の平々たり
ワキ上
舞働「神主たいまつ振りたて、〳〵御鎌を持つて岩間を傳ひ傳ひ下
つて半町ばかりの海底の和布を刈り歸り給へば程なく跡に潮さ
し滿ちてもとの如く荒海となつて波白妙のわたづみわだの原天
を浸し雲の浪煙の波風海上に收まれば波風海上に收まれば蛇躰
龍宮に飛んでぞ入りにける〳〵

奉る臣下也。偖も出雲の國に於て今月の神有月とて諸神影向なり。

御神事様々の由承及びひ程に此度參詣仕ひ

遙々と行へ時雨る雲霧の山又山を越え過ぎて神有月も名にしおふ出雲の國に着きにけり

妻こめし宮路にはこぶ歩みかな

聲ならん

「抑是の當今に仕へ

「朝立や旅の衣の

「尾上の松の梢まで神風誘ふ

「實や濁世の人間と生れ來ぬれど誓ひある神につかふる身にしあれば洩ぬ惠にかゝり來て心の儘の春秋を送迎へて。

年月の盡せぬ世々を頼むなり

「八雲立つ出雲八重垣

いづくにか神の宿らぬ影ならん

「我出雲の國大社に參り案内を伺ふ處に宮人數多來れり。いかに方々に申すべき事のひ

「是の此邊にての見なれ申さぬ御事也。いづくよりの御參詣にてひぞ

「さんひ是の朝に隙なき身なれ共當國に於て今月の神有月とて諸神殘す影向の地と

承及びてゐへば此度君に御暇を申遙々參詣申たり　ト「げに有難や神と君との「隔てなき世のしるしとて「歩みを運ぶ此神の

ワキ

小謡「恵み普き　シテ「月影も　上歌同　※「神の世を思ひ出雲の宮柱〳〵ふとし

き立ちて敷島の大和島根迄動かぬ國ぞ久しき實や紅も深くなり

ゆく梢より時雨て渡る深山邊の里も冬立つ氣色かな〳〵

ワキ詞

「不知案内の事にてゐへば當社の神秘委しく御物語ゐへ　打カケ「抑出雲の國大社の三十八社を勸請の地なり　※「然るに五人の王子おはします　同　第一のあじかの大明神と現れ給ふ山王權現是也

シテ中

「第二には湊の大明神九州宗像の明神と現れ給ふ第三は伊那佐の速玉の神常陸鹿島の明神とかやうに　クセ「第四には鳥屋の大明神信濃の諏訪の明神と即ち現じおはします第五には出雲路の大明神伊豫の三島の明神と現れ給ふ御誓ひ實曇りなき長月や月の晦日にとりわきて「住吉一所の影向なる殘りの神々は十月一日の寅の時に悉く影向なり様々色々の神遊び今も絶えせぬ此宮居語るも中々愚なる誓ひなるべし　地上「實有難き物語〳〵末世ながらも隔てなき神の威光ぞあらたなる　「なか〳〵なれや年々にけ

ふの今宵の神遊び　地上「其役々も　同上「數々に　あらぶる神達の
舞歌の袖ひくや御注連の名のたれと白木綿かゝる玉垣に立寄る
と見えつるが神の告ぞと云ひすて、社壇に入にけり社壇の内に
入にけり　出場「時雨るゝ空も雲晴れて月も輝く玉の御殿に光を添
ふる氣色かな　天女上「我の是出雲の御崎に迹を垂れ佛法王法を守り
の神本地十羅刹女の化現也　天女舞打上「容顏美麗の女躰の神〳〵光も
輝く玉の簪かざしも匂ふ袂を返す夜遊の舞樂のおもしろや
上實類ひなき舞の袖〳〵靡くや雲の絕え間より諸神の殘らず現
れ給ひ舞樂を奏し神前に飛行しはやとく姿を現し給へと夕べの
月も雲晴れて光も朱の玉垣輝き神躰現れおのしますの　上實や尊
き御相好〳〵まのあたりなる神德を受るも君の惠みかな
シテ上「迎夜遊の神祭委くいさや現し彼客人を慰ん　地上「偖神樂の役々の
「住吉鹿島　諏訪熱田其外三千世界の諸神の爰に影向なり取々
の小忌の袖返す〳〵も面白や　同上ノル樂打上舞樂も今の時過て〳〵更行
く空も時雨る雲の沖よりはやて吹立つ波の海龍王の出現かや
（三百九）龍神上「抑是の海龍王とは我事也偖も毎年龍宮より黃金の箱に小龍を入

上ル　同上
れ神前に捧げ申也　ノル　龍神則現れて
波を拂ひ潮を退け汀
に上り御箱を据置き神前を拜し渇仰せり　打上「其時龍神御箱の蓋
を
忽開き小龍を取出し　靜シテ下　舞働打上「四海安全に國治り四海安全に國治て五
の實有難き惠みかな
穀成就福壽圓滿に愈々君を守るべしとゆふしての數々神々取々
に御先を拂ひ神あげのお山に上らせ給へば龍神平地に波浪を起
し逆卷く潮に引かれ行けば諸神ゆ虛空に遍滿しつゝ實あらたな
る神ゆ社内實あらたなる神ゆ社内龍神ゆ海中に入りにけり※

前シテ老翁　後ツレ東方朔
前ツレ男　後ツレ四王女
ワキ帝王　ワキツレ臣下

ワキ「面白や四時移易くして春過き夏暮れ今ゆ早初秋の七日七夕の星
の祭を急ぐ也　ワキツレ「帝の御殿ゆ承華殿　ワキ「さながら花の袖を連ね
上歌前　御遊をなして色々の樂しみつきぬ其氣色音に聞く喜見城
も是にゆいかで勝るべき唯是君の御威光廣き惠みゆありがたや
ツレ二人「治まれる御代の光に數ならぬ身迄も安き住居かな
ツレ二人「惠みも廣きこの君の御影を賴むばかりなり　シテ「夫賢王の御代の

しるし五日の風や十日の雨　濕ふ四方の草木迄靡き隨ふ此時に
生れあふ身の頼もしや
時しもけふの織女のあふ瀬を急ぐ頃
なれや　秋來ぬと目に見ぬ空の自から〳〵音變て吹く〳〵風の
袖も涼き夕ま暮靡く稻葉の色迄も千年の秋の初め哉〳〵

「いかに奏聞申べき事のひ
「奏聞申さんとの、いかなる者ぞ
「是の此國の傍に住者にてひが申上度仔細のひひて參內申てひ
「去ば此方へ參りひへ
「是の此國の傍に住む者にてひがめてた
き瑞相の御座ひひて參りてひ此程三足の青鳥御殿の上を飛廻り
ひ是西王母が寵愛の鳥にてひ即ち西王母此君へ參禮申すべし此
事奏聞申さん爲に參りてひ
「かゝるめでたき事こそひのね猶
々仙人の謂懇に物語りひへ
「それ仙鄉といつぱ人間に交のら
ず松の葉をすき苔を身に着て年の經れとも樂しみ盡きず飛行自
在の通を得る　「忝なくも悉達太子の仙人に仕へおのしまし採
菓汲水年を經て終に成道し給ひて大聖世尊となり給ふ　然る
に仙人の其數限りも知らぬ中にも西王母と聞えしの西方極樂無
量壽佛の化現なればはかりなき命の仙人となるぞめでたきされ

ば園生に植うる桃の三千年に一度花咲き實なる此木の仙薬となるぞふしぎなる「今のつゝまし我こそ其名も世々に隠れなき東方朔と聞えしの此老翁が事也君桃實を聞こし召さば御壽命長遠に御身も息災なるべし急ぎ王母を伴ひ重ねて參内申さんと庭上を立つて歸る波の聲ばかり殘りつゝかたちの雲に入りにけり〳〵

地上 抑是の仙郷に入つて年久しき東方朔とは我事なり

偖も我西王母が桃實を度々服せし其故に壽命既に九千歳に及べり彼の桃實を君に捧げ申さんとの誓ひあり

地上 いかにやいかに西王母と〳〵參内申すべし

打上 ふしぎや西の空よりも〳〵白雲一群降ると見えしが三足の青鳥翅をならべて飛び廻り姿も妙なる王母の出立光りも輝く衣冠を着し斑龍に乘じて顯れ給ふまのあたりなる奇特かな

打上 「王母の庭上に歩み出で〳〵て彼の桃實を捧げ持つて上覽に備へ奉れば帝王御感の餘りにや糸竹の調數をつゝし皆一同に奏て給ふ舞樂の秘曲の面白や

地上 樂

打上 舞樂も漸々時過ぎて〳〵夕陽西に傾むきければおの〳〵君に御暇申し歸らんとせしに帝王名殘を惜しみ給ひ重ねて參内申すべしと。

宣旨を蒙り二人ゆ伴ひ出でけるが王母ゆ斑龍にゆらりと打乗り
遙かの雲路によぢのぼり遙かの雲路によぢ上つて又天上にぞ歸
りける

四番目　春榮　八月　シテ増尾稲直　子方増尾春栄丸
各二番　トモ従者　ワキ高橋権頭
ワキ詞

「是は高橋權の頭にてゐ候も此度宇治橋の合戦に身方打勝ち分捕
功名數を盡す某が手にも囚人數多ゐ中にも春榮殿と申す幼き人
を生捕申てゐ此由を申上てゐへば近き程に誄し申せとの御事に
てゐ間春榮殿へ此由を申さばやと存ゐ「大第ニシテトモ人ヨハク」「散らぬ先にと尋ね行
くゝ花をや風の誘ふらん」「是ゆ武藏の國の住人増尾の太
郎種直にてゐ候も宇治橋の合戦に弓手の肩を射させ其矢を抜か
んと少し傍に引退きゐ間に弟にてゐ春榮深入しやみゝと生捕

られてひ承りひへば生捕何れも近き程に誅せらるゝ由申ひ間某も囚人の數に入らばやと存じ唯今春榮がありかへと急ぎひ

進行二人ウヤ「住み馴し都の空の雲居にて〳〵朝立ち添ふる旅衣日も重りて行く程に名にのみ聞し伊豆の國府三島の里に着にけり〳〵

シテ詞「急ひ程に伊豆の三島に着てひ此所にて囚人の奉行をば高橋とやらん申ひ尋ねて對面申度き由申ひへ「畏てひいかに案内申しひ。

囚人の奉行高橋殿と申の何所に御座ひぞ「何の御用にてひぞ

頼みたる人の事にてひ「いや苦しからぬ者にてひ是の春榮殿のゆかりの者にてひ高橋殿へそと御目に懸り度事のひひて是迄參てひ其由をよく〳〵御心得有て御申ひへ「心得申ひ囚人のゆかりの人の堅く禁制にてひへ共春榮殿の御事の頼み申ひ別して痛り申されひ間其由を申して見ひべし暫く御待ちひへ

ツレ「心得申ひ「いかに申ひ春榮殿のゆかりと申て若き男の來りひて御目に懸り度由申ひ間堅く御禁制にてひへ共春榮殿の御事にてひ間申入て見うずる由申てひ「何と春榮殿のゆかりの人と申て某に對面有度き由申すが汝の知如く囚人のゆかりに對面ゆ

禁制にてゐへ共春榮殿の御事の別して痛り申ゐ間そと對面申さうずるにてゐ去ながら大法の事にてゐ間太刀刀を預りゐへ

「畏てゐいかに申ゐ唯今の通りを申てゐへば固く禁制にてへゐ共春榮殿のゆかりの御事にてゐ程にそと御目に懸らうずると申されゐさらば太刀刀を賜りゐへ「心得申ゐ尋ね申てゐへば春榮殿のゆかりならば高橋別して痛り申ゐ間對面申さうずる由申されゐ去ながら大法にてゐ程に太刀刀禁制の由申ゐ「さらば太刀刀を參らせゐべし

「春榮殿のゆかりと仰せゐのいづくに渡ゐぞ「さんぬ是にゐ「是の春榮殿の爲にの何にて渡ゐぞ

「是の春榮が兄に增尾の太郎種直と申す者にてゐが今度宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ其矢を拔かんと少し傍に引退きゐ間に弟にてゐ春榮深入し生捕られてゐ間餘に見捨て難くゐへば某も一所に誅せられん爲に遁々是迄參てゐ春榮に引合せられて給りゐへ「委細承りゐ是迄の御出眞にゆゝしくゐ聽て其由を春榮殿へ申べしゐ暫く御待ゐへ「心得申ゐ「いかに春榮殿へ申ゐ御身の御舍兄に增尾の太郎種直と御名乘有て是迄御出にてゐ。

急いで御對面ひへ　春榮「是の眞しからずひ兄にてひ者の宇治橋の合戰にて重手負ひ存命不定とこそ承ひひつれ「あらふしぎや正しく御舍兄と仰せひ者を去ながら物のひまよりそと御覽ひへ

春榮「ふしぎの事にてひ譜代召つかひひ家人にてひ間急ぎ追つ返して給りひへ「偖の眞に家人にてひかさあらば聽て追つ返しひべしいかに以前の人の渡ひか

「是にひ「仰の通りを申てひへば物の隙より御覽ひひて兄にてのなし譜代召つかはるゝ家人なれば急ぎ追つ返し申せとの御事にてひ何とて聊爾なる事をば承ひそ「暫く先御心を靜めて聞こし召されひへ家人の身として

兄と名乘り一所に誅せらるゝ事のひべきかいか樣にも御沙汰ひひて引合せられて給りひへ某對面して家人か兄かの勝劣を見せ申ひべし「實々是の尤にてひさらば某たばかつて呼出しひべし其時御袖にすがられて委く仰せひへ「心得申ひさらば是に待申ひべし「いかに春榮殿に申ひ唯今の者をばあら〳〵と申し追つ返してひ去ながら彼者の心中餘に不便にひ間後姿をそと御覽ひへ此方へ渡ひへ「いかに春榮何とて某をば家人との申

すぞ儲も今度宇治橋の合戦に弓手の肩を射させ其矢をぬかんと
て少し傍に引退きゐ隙に御身の深入し生捕られたり其際の先途
をも見届けざれば家人と云ふ事弟ながらも恥しうこそゐへ去な
がら一所に誅せられん爲に是迄々々來りたるに何とて左様に
申すぞ「いかに汝の三世のよしみを思ひ是迄々々來りたる志。
返す〳〵もやさしけれ去ながら汝の故郷に歸り母御に申べきや
うの春榮こそ誅せられゐへ逆様なる御弔ひにこそ預りゐべけれ
とよ〳〵申ゐへ「猶も家人と申すか深山木の其の梢との見
えざりし櫻の花に顯れにけり何と家人と下すとも終にの隠れよ
も非じヨワク「時を得て早くも育つ夏木立其木を夫と見るべきか早
とく歸れと叱りけり「山皆染むる梢にも松の變らぬ習ぞかし
「一千年の色とても雪にの暫し隠るゝなり「是を物にたとふれ
ば殿のやうかの父をうち「秦のかくいの師匠をうつ「今の
増尾の春榮の「現在の兄を家人といふ「是の逆罪たるべきに
「眞の深き孝行也「いや兎に角に命を捨つる迄種直是にて腹切
らんや刀の參らせつ御芳志に刀を賜りゐへ「のう〳〵暫くこ

のいかに　同上　命を助け申さんとてこそ家人とも申つれ忠が不忠
になりけるか赦させ給へ兄御前〳〵　上欠　種直も春榮も〳〵
四人守護のつものもたがひの心を思ひやり實持つべきの兄弟
也とて共に袂を濡らしけり〳〵　ワキ詞
を感じ申し我等も落涙仕てひ「言語道斷御兄弟の御心中
り申す事餘の儀にあらず某子を一人持てひを宇治橋の合戰に討
たせてひが此春榮殿の面ざし少しも違のずひ間天晴御命も助り
給ひへかし某申受け遺跡を繼がせ申度さとの念願にてひや何
と申すぞ是の眞にてあるかあら何ともなや唯今申つる事も徒事
にてひ又鎌倉より早打立つて箱根を越さぬ先に囚人を皆誅し申
せと仰せ出されてひ御痛のしながら力なき事春榮殿も御最期
の御用意をさせ申されひへ又種直の急いで故郷へ御歸りひへ
「暫くひ春榮が事の幼き者の事にてひ間春榮を助け某を誅して給
のりひへ「仰の去事にてひへ間中
々適ひ申まじくひ「仰の去事にてひへ共早目錄にて御目に懸てひ間中
を助け某を誅して給のりひへ「是の尤にてひへ共中々さやう

には.なるまじくゐ　「偖の.力なき事。是迄遙々.來りゐひて.春榮が
最期を見捨て.歸る事の.有まじくゐ間某をも一所に誅して.給の.り
ゐへ　「夫の.免も角もにてゐ　「いかに春榮故郷へ形見を.贈り
ゐへいかに小太郎。おことの國に歸り母御に.申べきやうの.春榮が
最期の有様餘りに見すて.難くゐ程に諸共に誅せられゐ逆さまな
る御弔ひにこそ預りゐべけれとよく〳〵.申ゐへ是なる護りの種
直が母御の方より賜のりたる護佛の觀世音種直が形見に御覽ゐ
へとよく〳〵申ゐへ　「是なる文の春榮が最期の文にてゐ也。又

（三百二十九）

形見にの.鳥羽玉の我黑髮の裾を切りさばかり明暮一條を千條と
撫でさせ給ひし髮を春榮が形見に參らする　「あら定めなや去
にても我こそ殘て御跡を弔ふべきにさのなくて成人の子をば先
だてゝ　歎き給のん母上の御心の中思ひやられて痛しや
寶や生としいけるものゝ何れか父母を悲しまざる必ず一世に限るべ
からず世々以て父母の數々なり　「夫十二因緣より二十五有の
誰か又自他ならん　「然れば生し流轉に廻る事生々の親子皆以て
沈淪生じての死し死してのの生し流轉に廻る事生々の親子皆以て
火宅の境を出ず

して煩惱業苦の三つの綱に繋れ來ぬるはかなさよ　夫生死に流轉して人間界に生るれば八つの苦しみ離れず過去因果經をおもんみよ殺の報殺の緣たとへば車輪の如し我人を失へば彼又我を害す世々生涯苦しみの海に浮き沈みて御法の舟橋を渡りもせぬぞ悲しき殊更此國の神國といひながら又の佛法流布の時教への法も盛ん也殊に所のあづまがた佛法東漸にあり有明の月のわづかなる人界急いで來迎の夜念佛聲清光に彌陀の國の涼しき道ならば唯心の淨土なるべし　「處を思ふも賴もしや爰は東路の故郷を去て伊豆の國府南無や三島の明神本地大通智勝佛過去塵點の如くにて黃泉中有の旅の空長闇冥の巷迄も我等を照し給へと深くぞ祈誓申ける雪の古枝の枯てだに二度花や咲ぬらん

（三百三十一）

「いかに高橋殿鎌倉よりの早打也暫く御待ちひへとよ　「すの又早打來れるの遲し斯れとの御使か　「いや若宮別當の申により、四人七人の免狀也　「偖春榮殿の　「七人のうち　「あゝ嬉し〳〵先讀まん何々若宮別當の申により四人七人免狀の事第一番にの別當の御弟豐前の禪師第二番には豐後の次郎第三番にの

増尾の春榮丸。殘りの先々讀みても無益はや助くるぞ春榮と
同上
太刀の下よりひきたて、命助かる兄弟の嬉しさもなか〳〵に思
ぬ程の心かな今の心の獸の雲に吠えけん心地して千々の情あ
り難き兄弟のよしみこそ眞に哀なりけれ　「いかに種直に申ひ。
以前も申如く春榮殿の御事天晴御命も助り給ひへかし申請け
某が一跡を繼がせ申度きとの念願叶ひてひ此上の賜りひへ
（梁小話二行目のためでたき迄）
る重代の太刀春榮殿に奉り重て千秋萬歳の猶悦びの盃の影も
「實此上の榮らせひべし　「けふの殊更最上吉日なれば家に傳の
廻るや朝日影伊豆の三島の神風も吹治むべき代の初幾久しさ共
限じや嘉辰令月との此時を云ぞめでたき猶々廻る盃の度重なれ
心の萬歳樂　「いかに種直。かゝるめでたきをりなれば一指御ま
ば春榮もお酌に立ちて親と子の定めを祝ふ祝言の千秋萬歳の舞
の袖飜へしまふとかや　「千代に八千代をさゝれ石の　「祝ふ

ひひへ　「さらばそとまはうずるにてひ　祝ふ心の萬歳樂
「東路の秩父の山の松の葉の　千世の影そふ若緑かな若みどり
かな〳〵　「老木も若緑　「立つや若竹の　「親子の睦み

同上 又は兄弟かれと云ひこれといひいづれも〳〵睦ましく親子兄弟と榮ふる事も是孝行を守り給ふ三島の宮の御利生と伏し拜み親子兄弟さも睦ましく打つれて鎌倉へこそ參りけれ

五番目 略脇能

第六天

三月

前シテ 里女
ツレ 里女
ワキ 解脱上人
後シテ 魔王
後ツレ 素戔嗚（詞なし）

ワキ 次第 ヨワク「心の花を手向とて〳〵。大神宮に參らん

ワキ詞 是は解脱と申す沙門にて候。我未だ大神宮に參らず候程に此度思ひ立ち伊勢參宮と志し候

道行 旅衣けふ九重を立出て〳〵。末は音羽の山櫻花の瀧川是ぞこの行くも歸るも逢坂の杉の木の間に波よする湖向ふ鏡山やう〳〵行けば鈴鹿路や多氣の都の程もなく度會の宮に着きにけり〳〵

シテ ツレ 二人 一セイ ツヨク「神路山御裳濯川の其かみに契りし事の末は違はじ

ツレ 二句「永き代迄も仕へ來て盡きぬめぐみの賴もしや

シテ サシ「見渡

せば千木もゆがまずかたそぎもそらず是正直捨方便の形を現す
かと見え古松枝を垂れ老樹綠を添へ皆是上求菩提の相を表す有
難かりし宮居かな　神風に心安くぞ任せつる　櫻の宮の花
盛〳〵花の白雲立迷ひ空さへ匂ふ月讀の洩り來る影も長閑に
て知るも知らぬも道の邊の行かふ袖の花の香に春一入の氣色哉
「是なる御僧のいづくよりの御參詣にてゐぞ　「是の
都方より出たる沙門にてゐ和光同塵の本願の結緣の始濁世の我
等何ぞ神力の妙樂を蒙らざらんや神秘を委しく語りたまへ

「優しき人のいひ事や懇に語り參らせうずるにてゐッヨク「夫御裳濯
川といつぱ倭姫の命七百餘歲に至る迄宮居を尋ねおのしますし
「然れば當國一見の浦に上り裳裾のけがれ給ひしを此川にて洗ひ
しにより御裳濯川と申すなり　抑當社の垂仁の御宇に始て下
つ岩根に宮柱ふとしきたて、日神月神をあがめ申す也蛭子素盞
嗚の枝を連ぬる御神高天の原の昔より「今も變らぬ神德の其
品々の方便を語るもいかでつくさまし仰きても猶餘りあり斯る
惠みをおしなめて賴めや賴め神の告木綿四手に榊葉そへ御法の

障碍あるべしと夢に來て申とて掻消すやうに失にけり〳〵

「斯て神前に心を澄ます折ふしに　地上「俄かに大空冥かへり風雨雷電肝を消し六種の震動夥だしや　大鼓「抑是の佛法を破却する第六天の魔王との我事也　打上「偖又供奉の誰々ぞ　「六天にの煩惱の惡魔　地「陰魔死魔　同上「天子業魔　其外從類悟の道を障碍の群鬼の様々なり　「其時解脫合掌して〳〵觀念をなしければふしぎや天つ空よりも素盞嗚現れ出で給へり　早笛「即ち素盞嗚現れ給ひ即ち素盞嗚現れ給へばさしもに猛き六天なれども恐れをなしてぞ見えたりける　舞働「素盞嗚猶も怒り給ひ〳〵て寶棒を取直し打たんとせしに飛び違ひ須彌に上らんとするを引き留め大地に打伏せて忽ちさん〴〵に苦を見せ給へば今より此土に來ましと誓をなせば尊の雲居にあがらせ給ひ魔王の通力つきはて魔王の通力つき果て虛空に跡なく失せにけり

五番目　　土蜘蛛　　七月

前シテ僧　ツレ源頼光　後シテ土蜘蛛ノ精魂　ワキ胴武者　トモ頼光ノ臣下

ツレ女　次第　ヨワク「浮立つ雲の行くへをや、風の心ちを尋ねん　「是の頼光の御内に仕へ申す胡蝶と申す女にてひ扨も頼光例ならず惱ませ給ふにより典薬の頭より御薬を持ち唯今頼光の御所へ參りひいかに誰か御入ひ　「誰にて御座ひぞ　女「典薬の頭より御薬を持て胡蝶が參りたる由御申しひへ　「心得申ひ御機嫌を以つて申上うずるにてひ　頼光「爰に消えかしこに結ぶ水の泡の浮世に廻る身にこそありけれ實や人知れぬ心の重き小夜衣の恨みん方もなき袖をかたしきわぶる思ひかな　トモ「いかに申上げひ典薬の頭より御薬を持ちて胡蝶の參られてひ此方へ御參りひへ　女「如何に申上ひ典薬の頭より御薬を持て參りてひ御心ちの何と御入ひぞ　頼光「昨日より心も弱り身も苦しみて今の期を待つばかり也　女「いや〳〵夫の苦しからず病うの苦しき習ひながら療治によりて癒る事の例の多き世の中に

頼光小謡「思ひも捨てず様々に　上同※色を盡して夜晝の〳〵境も知らぬ有様の時の移るをも覺えぬ程の心かなげにや心を轉ぜずそのまゝ

に思ひ沈む身の胸を苦しむる心となるぞ悲しき※ツヨク「月清き夜半
とも見えず雲霧のかゝれば曇る心かないかに頼光御心ちの何と
御座ひぞ 頼光「ふしぎやな誰共知らぬ僧形の深更に及んで我をと
ふ其名のいかに覺束な 「愚の仰ひや惱み給ふもわがせこが來
べき宵なりさゝがにの 「蜘蛛の振舞かねてより知らぬといふ
に猶近づく姿の蜘蛛の如くなるが ※「かくるや千筋の糸筋に
「五體をつゞめ 「身を苦しむる 化生と見るよりも化生と見
るよりも枕にありし膝丸を拔き開きちやうと切ればそむくる所

をつゞけさまに足もためず薙ぎふせつゝえたりやおうと罵る聲
に形の消えて失せにけり〳〵※ワキ詞
參じてひ何と申したる御事にてひぞ 「御聲の高く聞えひ程に馳せ
かな近う來りひへ語つて聞せひべし 「いしくも早く來たる者
知らぬ僧形の來り我心ちを問ふ何者なるぞと尋ねしに我がせこ
が來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてしるしもといふ古
歌を連ね即ち七尺ばかりの蜘蛛となつて我に千條の糸を繰りか
けしを枕にありし膝丸にて切りふせつるが化生の者とてかき消

すやうに失せし也。是と申すも偏に劍の威德と思へばけふより膝丸を蜘蛛切と名付くべし。なんぼう奇特なる事にてゆなきか

「言語道斷。今に始めぬ君の御威光。劍の威德。かたく以つてめでたき御事にてゆ又御太刀づけの跡を見ゆへばけしからず。血の流れゆ此血をたんだへ。化生の者を退治仕らうずるにてゆ「急いで參りゆへ「畏つてゆ「土も木も我が大君の國なればいづくか鬼のやどりなる　其時獨武者進み出で彼の塚に向ひ大音上げて云ふやう是の音にも聞きつらん賴光の御內に其名を得たる

獨武者いかなる天魔鬼神也とも命魂を斷たん此塚を。　崩せや崩せ人々と呼ばゝり叫ぶ其聲に力をえたるばかり也　下知に從ふ武士の〳〵塚を崩し石をかへせば塚の內より火焰を放ち水を出だすといへども大勢崩すや古塚のあやしき岩間の蔭よりも鬼神の形の現れたり　「汝知らずや我昔葛城山に年を經し土蜘蛛の精魂也猶君が代に障をなさんと賴光に近づき奉れば却つて命を斷たんとや　「其時獨武者進み出で其時獨武者進み出で汝王地に住み乍ら君を惱ます其天罰の劍に當つて惱むのみかの

命魂をたゞんと手に手をとり組みかゝりければ蜘蛛の精靈千筋の糸を繰りためて投げかけ〳〵白糸の手足に纏ひ五躰をつゞめて仆れ臥してぞ見えたりける 舞働打上 「然りとはいへども〳〵神國王地の惠を賴みかの土蜘蛛を中に取りこめ大勢亂れかゝりければ劒の光に少し恐るゝ氣色を便りに切り伏せ〳〵土蜘蛛の首うち落し喜び勇み都へとてこそ歸りけれ※

五番目 略脇能

舍利

季なし

ワキ詞

「是の出雲の國美保の關より出でたる僧にてゐ我未だ都を見ずゐ程に此度思ひ立ち洛陽の佛閣一見せばやと思ひゐ 道行 朝立つや空ゆく雲の美保の關〳〵心ゐ留る古里の跡の名殘も重りて都に早く着にけり〳〵日を重ねて急ぎゐ間程なく都に着てゐ先承及びたる東山泉涌寺へ參り大唐より渡されたる十六羅漢又佛舍利をも拜み申さばやと存ゐ 前シテ里人 後シテ足疾鬼 ワキ旅僧 ツレ韋駄天 是なる寺を泉涌寺と申すげにゐ寺中の人に委しく案内をも尋ねばやと思ひゐいかに誰か渡ゐ

「何事を御尋ねゐぞ（ワキ）　「是の遙かの田舎より上りたる僧にてゐ當寺の御事を承，及び遙々參てゐ大唐より渡たる十六羅漢又佛舍利をも拜み申度ゐ（ワカシ）　「實々（ジツ）聞し召し及ばれて御參りゐか聊爾に拜み申事叶のずゐ但し今日かの御舍利の御出である日にてゐ我等當番にて唯今戸を明け申さんとて鍵を持て罷り出でゐ先此舍利を御拜みあつて其後山門に登りて十六羅漢をも拜ませ申ゐべし。

こなたへ御出ゐへ（イデ）がら〳〵さつと御戸を開き申てゐよ〳〵御拜みゐへ（ワキ）　「あら有難やゐ去ば御供申ゐべし（ワキサシ）　「實や事として

何か都の愚なるべきなれ共殊更靈驗あらたなる佛舍利を拜み申事の貴さよ是なん足疾鬼が奪ひし韋馱天取返し給ひし現住奇特の牙舍利の御相好感涙肝に銘ずるぞや一心頂禮萬德圓滿釋迦如來（上歌同）　「有難や今も在世の心ちして〳〵まのあたりなる佛舍利を拜する事のあらたさを何にたとへん墨染の袖をもぬらす氣色哉〳〵（シテ上ツヨク）　「有難や佛在世の御時の法の御聲を耳にふれ聞法値遇の結緣に一劫をも浮かむ此身乍ら一世安樂の心を得るに後五の時代の今更に猶執心の見佛の緣うれしかりける時節かな

ワキ詞「我佛前に觀念し寥々とある折節に御法を貴む聲すなり。いかなる人にてましますぞ

シテ「是ハ此寺のあたりに住者なるが。妙なる法の御聲をうけて。爰に立よる計なり

ワキ「よし誰とてもその望佛舍利を拜まん爲ならば同じ心ぞ。我も旅人

シテカル ヨワク「きたるもよそ人

ワキ 二人 ※小謡「所も亦　都のほとり東山の末に續ける峯なれや

上歌同 ※「月雪の古き寺井ハ水澄みて〳〵　庭の松風さえかへり更け行鐘の聲迄も。心耳を澄ます夜もすがら實聞や峯の松谷の水音澄渡る嵐や法を。唱ふらん〳〵

※クリ地 ツヨク 夫佛法あれば世法有煩惱有ば菩提有佛有ば

※囃子 終り迄 衆生も有善惡又不二なるべし

シテ サシ ※「然に後五百歳の佛法既に末世の折を得て同西天唐土日域に時至つて久堅の月の都の山並に佛法流布の驗しとて佛骨を納め奉り

シテ下「實目前の妙光の影　同中 此御舍利にしくハなし

クセ下 然るに佛法東漸とて三如來四菩薩も皆日域に地を占めて衆生を濟度し給へり常在靈山の秋の空僅に二月に望んで魂をけし泥洹双樹の苔の庭遺跡を聞て腸を斷つ有難や佛舍利の御寺ぞ在世なりける實や鷲の御山も在世のみぎんにこそ草木も法の色を見せ皆佛身を得たりしに

シテ上「今ハさみしく冷ま

しき月ばかりこそ昔なれ孤山の松の間にのよそ〳〵白毫の秋の
月を禮すとか蒼海の波の上に僅に四諦の曉の雲を引く空のさみ
しさぞな驚の御山夫の上見ぬ方ぞかし爰はまさに目前の佛舍
利を拜する御寺ぞ貴かりける　「ふしぎやな俄に晴たる空かき
曇り堂前に輝く電光このそもいかなる事やらん　「今の何をか
シテ詞
「舍利殿にのぞみ昔のごとく
包むべき其古への疾鬼が執心猶此舍利に望あり許し給へやお僧
達　「このそも見れば不思議やな面色かはりおにとなりて
ワキ　シテ
「金冠を見せ　「寶座をなして

ワキ詞上
栴檀沈瑞香栴檀沈瑞香の上に立登る雲煙を立て、電の光に飛び
紛れてもとより足疾鬼とのの足早き鬼なれば舍利殿に飛上りく
〳〵くると見る人の目をくらめて其紛れに牙舍利を取て天井
を蹴破り虛空に飛んであがると見えしが行衛も知らず失せにけ
り〳〵　「抑是のの此寺を守護し奉る韋駄天とのの我事なり爰に
イロエ　韋駄天
ツキ入
足疾鬼といふ外道在世の昔の執心殘つて又此舍利を取て行く。
いづく迄かの遁すべき其牙舍利置いて行け　「いや適ふまじと
よ此佛舍利のの誰も望のあるものを　「欲界色界無色界〳〵化
ワキ詞
舍利
同上
後シテ上
四

天耶摩天他化自在天三十三天攀りて帝釋天迄追上ぐれば梵王天より出あひ給ひてもとの下界に追下す「左へ行も右へ行も前後も天地も塞て疾鬼の虚空にくるくるくると渦巻い廻るを韋駄天立より寶棒にて疾鬼を大地に打ち伏せて首をふまへて牙舍利のいかに出だせや出だせとせめられてなくなく舍利を指し上ぐれば韋駄天舍利を取給へばさばかり今迄の足早き鬼のいつしか今の足弱車の力も盡き心も荘々と起上りてこそ失せにけれ

五番目　小鍛冶
器脇能　十一月　前シテ 童　子　ツレ 大臣橘道成
ワキ 三條小鍛冶　後シテ 稲荷明神

大臣詞

「是の一條の院に仕へ奉る橘道成にてひ扨も今夜帝ふしぎの御告ましますにより三條小鍛冶宗近を召し御劔を打たせらるべきとの勅諚にてひ間唯今宗近が私宅へと急ぎひいかに此家の内に宗近が有か

「宗近との誰にて渡りひぞ

大臣

「是の一條の院の勅使にて有ぞとよ扨も帝今夜ふしぎの御告ましますにより宗近を召し御劔を打たせらるべきとの勅諚なり急いで仕ひへ

「宣旨畏つて承ひ左様の御劔を仕べきにの我に劣らぬ者相槌を仕てこそ。

小鍛冶

御劔も成就ひべけれ是の兎角の御返事を申兼たるばかりなり

大臣「實々汝が申所の理なれ共帝ふしぎの御告ましませば賴母敷思ひつゝはや〳〵領承申べしと重ねて宣旨有ければ「此上のとにも角にも宗近が〳〵進退爰に谷りて御劔の刀の亂るゝ心なりけり去乍ら御政道直なる今の御代なれば若しも奇特の有やせん。夫のみ賴む心哉〳〵「言語道斷一大事を仰せ出だされてひもの哉か樣の御事の神力を賴み申ならでゆと存ひ某が氏の神ゆ稻荷の明神なれば是より直に稻荷に參り祈誓申さばやと存ひ

「のう〳〵あれなるの三條の小鍛冶宗近にて御入ひか「ふしぎやなべてならざる御事の我名を指して宣ふのいかなる人にてましますぞ「雲の上なる帝より劔を打ちて參らせよと汝に仰有しのう「去ばこそ夫に付ても猶々ふしぎの御事かな劔の勅も唯今なるを早くも知ろし召さるゝ事返すゞ〳〵も不審なり「實々不審の去事なれ共我のみ知ればよそ人迄も「天に聲有、

（三百五十七）

小鍛冶「地に響く「壁に耳岩の物いふ世の中に〳〵隱れのあらじ殊になを雲の上人の御劔の光の何か暗からん唯賴め此君の惠みに

よらば御劔もなどか心にかなひざるなどかかなひざるべき

クリ地ツヨク「夫漢王三尺の劔居乍ら晋の亂れを治め又煬帝がけいの劔周室の光を奪へり」其後玄宗皇帝の鍾馗大臣も劔の徳に魂魄の君邊に仕へ奉り「魍魎鬼神に至る迄劔の及の光に恐れて其寇をなす事を得ず「漢家本朝に於て劔の威徳申すに及ばぬ奇特とかやクセ中

又我朝の其初め人皇十二代景行天皇詔の御名をば日本武と申し「中が東夷を退治の勅を受け關の東も遙なる東の旅の道すがら伊勢や尾張の海面に立つ波迄も歸る事よと美みいつか我も歸る波の。

衣手にあらめやと思ひつゞけて行く程に「爰やかしこの戰ひに人馬巖窟に身を碎き血の流るゝ事鹿の川と成つて紅波楯流し數度に及べる夷も兜を脱いで矛をふせ皆降參を申けり尊の御宇より御狩場を始め給へり頃は神無月二十日餘りの事なれば四方の紅葉も冬枯の遠山にかゝる薄雪を眺めさせ給ひしに「夷四方を圍みつゝ枯野の草に火をかけ餘焔頻に燃え上り敵攻鼓を打かけて。

仕舞 火焔を放ちてかゝりければ「上ゲ拂ひ忽ちに炎も立退けと四方の草を薙き拂へば劔の精靈嵐と成

小鍛冶

つて炎も草も吹き返されて天に輝き地に充ち〳〵て猛火の却つて敵を焼けば數萬騎の夷共の忽ち叛にて失せてんげり其後四海治まりて人家戸ざしを忘れしも其草薙の故とかや唯今汝が打つべき其瑞相の御劒もいかで夫にの劣るべき傳ふる家の宗近よ心安くも思ひて下向し給へ

「漢家本朝に於て劒の威徳時に取つての祝言なり偖々御身のいかなる人ぞ

「よし誰とても唯賴めかし先々勅の御劒を打つべき壇を飾りつゝ其時我を待ち給のばゝ通力の身を變じ通力の身を變じて必ず其時節に參り會ひて御力を付申べし待給へと夕雲の稲荷山行備も知ず失にけり〳〵

「宗近勅に隨つて即壇に上つゝ不淨を隔つる七重の注連四方に本尊をかけ奉り幣帛を捧仰き願くの宗近時に至つて人皇六十六代一條の院の御宇に其職の譽を蒙ること是私の力にあらず伊弉諾伊弉冊の天の浮橋を踏み渡り豊葦原を探り給ひし御矛より初まれり其後南膽僧伽陀國波斯彌陀尊者より此方天國ひつきの子孫に傳へて今にいたれりぬかのくの〳〵宗近私の功名にあらず普天卒土の勅命によれりさあらば十方恒沙の諸神唯今の宗

近に力を合わせてたび給へとて幣帛を捧げつゝ天に仰ぎ頭を地
につけ骨髄の丹誠聞き入れ納受せしめ給へや ノラズ「謹」上再拜
地上ノル 拜笛打上「いかにや宗近勅の劍〳〵打つべき時節の虛空に知れり賴めや
賴め唯賴め 舞働「童男壇の上にあがり童男壇の上にあかつて宗近
に參拜の膝を屈し扨御劍の鐵の と問へば宗近も恐悦の心をさき
として鐵取出し教の鎚をはつたと打てば「ちやうと打つ
同上 ちやうちやう〳〵と打かさねたる鎚の音天地に響きておびた、
しや 打上「斯て御劍を打奉り表に小鍛冶宗近と打つ ※「神躰時の
神仕舞終り迄

弟子なれば小狐と裏にあざやかに うち奉る御劍の及び雲を
亂したれば天の村雲とも是なれや 同上「天下第一の〳〵二つ銘
の御劍にて四海を治め給へば五穀成就も此時なれや即ち汝が氏
の神稻荷の神躰小狐丸を勅使に捧げ申し是迄なりと云ひ捨て、
又群雲に飛び乘りまた群雲に飛び乘りて東山稻荷の峯にぞ歸り
ける 地

三百五番目　合浦　季ナシ　前シテ童子　ワキ里人　後シテ鮫人

（四ワキ詞）

「是の唐土合浦と申す所に住ひする者にてゐ今日の日もうらゝに（海）ゐ程に浦に出て釣するを眺めばやと思ひゐ（ツヨク）わたづみのそこともいさや白波の龍の都を出づるなりいかに此屋の内に主やまします一夜の宿を貸し給へ

（ワキ）「日も早暮れて戸ざしつるに宿と（シテ）の誰にてましますぞ「よし誰なり共其情に一村雨の雨宿り一夜の宿を貸し給へ「叩く水鶏の外面に立つや久堅の埴生の小屋に小雨降る（我妹子染小誰）

（ワキ）「床さえぬれば「わぎもこが（上歌同）※ひぢ笠の雨のふり來ぬ雨宿り雨の降きぬ雨宿りの頼む木陰かや一樹の陰の宿りも此世ならぬ契也一河の流を汲みて知る合浦の浦の江のほとりうろくづもなどや命恩の其なさけをば知らざらん〳〵※

（ワキ詞）「何と見申せども更に人間とのみ見え給ひずゐ名を御名乗りゐへ（シテ）「今の何をか包むべき我の鮫人といへる魚の精也命をつがれ參らせし報謝の爲に來りたり我なく涙の露の玉絶えぬ寶となるべき也　（下歌）鮫人涙に玉をなして命恩を寶珠を猶も捧げて合浦にも入らせ給へと前なる渚の波の上にいるよと見えつるが白魚となつ

て其儘にひれふして失せにけり跡ひれふして失にけり

中入 出端 早笛 ツヨク 後シテ上

「龍女は如意の寶珠を釋尊に捧げ變成就の法をなし

同上 ノル 奈落や奈落の底の白魚なれ共など命恩を報ぜざらんと波立騷ぎ潮うづまいて

ウタカタ 水の泡 餘仕舞 終り迄

同下 うたかたの上にぞ現れたる

シテ下 地謡 ※「是こそ眞如の玉の緒の〳〵壽命長遠息災延命の寶の珠は當來迄の二世の願ひも成就なるべし是迄なりや織りつる綾の浦は合浦珠は二度歸る波の千秋萬歳の寶の珠は千秋萬歳の寶の珠は合浦の浦にぞおさまりける※

二番目 生田敦盛 七月

シテ 平敦盛
子方 同遺子
ワキ 法然上人ノ従者

ワキ詞「是は黒谷法然上人に仕へ申者にて候又是に渡り候人は或る時上人賀茂へ御参詣御下向の時下り松の下に二歳ばかりなる男子の美しきを手箱の蓋に入れ尋常に拵へ捨て置きて候を上人不便に思召され抱かせ御歸り候ひて色々育て給ひ候程に早十歳に御餘り候父母のなき事を歎き給ひ候程に説法の後此事を御物語候へば聽衆の中より若き女性の走り出で我子にて候由仰せ候をひそかに御尋ね候へば一年一の谷にて討たれ給ひし敦盛の御子にておはし

まし候。此事を聞き給ひて。夢になり共父の姿を見せて給り候へと。賀茂の明神へ祈誓あるべき由仰せられ候ひて。一七日詣で給ひ。今日の早滿參にて候程に。同道申し賀茂の明神へ。參詣申候。是の早賀茂の明神にて御座候。よく〳〵御祈誓候へ 「有難や所からなる御社のあけの玉垣神さびて。心も澄める御手洗の深き惠を賴むなり 夢になり共たらちねの其面影を見せ給へ ※かくばかり。祈る心の末遂げば〳〵。惠みになどか洩るべきと。誓ひたゞすの神ともに願を叶へおはしませ〳〵 ※ 「あら不思議や。少し睡眠。

のうちに。あらたに靈夢を蒙て候 「あらめでたやな御靈夢の樣を御物語候へ 「あの御寶殿の中よりもあらたなる御聲にて。汝夢になり共父を見んと思はゞ。是より津の國生田の森へ下れと。あらたに靈夢を蒙て候 「是はふしぎなる事にて候もの哉。黑谷へ御歸りある迄もなく候。是より生田の森へ御供申候べし。軈て思召立ち候へ 山陰の賀茂の宮居を立出で〳〵。急ぐ行へは山崎や霧立ち渡る水無瀬川。風も身にしむ旅衣秋の來にけりきのふだに訪はんと思ひし津の國の生田の森に着きにけり〳〵

ワキ「御急ぎ候程に是の早津の國生田の森にて候森の氣色川の流都にて承及びたるにもいや勝りて面白き名所にて候あれに見えたる野邊の生田の小野にてもや候らん立寄り眺めばやと思ひ候こゝかしこを眺め候程には日の暮て候いかにあれに燈火の影の見えて候人家にて有りげに候立寄り宿を借らばやと思ひ候シテ「五蘊もとより是皆空何によつて平生此身を愛せん軀を守る遊魂夜月に飛び屍を失ふ空魄の秋風に嘯くあら心すごの折からやワキ「ふしぎやな是なる草の庵の内にさも花やかなる若武者の甲冑を帶し見え給ふぞや是のいかなる事やらん シテ「愚の人の心やな面々是迄來り給ふも我に對面の爲ならずや恥かしながら古への敦盛が幽靈來りたり ワキ「のう敦盛とや我父かと身にも覺えず走りより 同上袂にすがりたえこがれ〳〵なく音に立つる鶯の逢ふ事の嬉しさも憂き身にあまる計なりかくや思へど頼まれぬ夢の契を現に返す由もがな 後場子供取り込 ※「無惠やな忘れ形見の撫子の花やかなるべき身なれ共衰へはつる墨染の袂を見るこそ哀なれ扨も御身孝行の心深き故賀茂の明神に歩みを運び夢になり共我父

の姿を見せてたび給へと祈誓申す明神憐みおぼしまし閻王に仰
つかはさる閻王仰を承り暫しの暇を賜はるなり親子の契も今を
限りなるべし　同下　ふけゆく月の夜もすがら昔をいざや語らん
クセ下　然るに平家の榮花を極めしその始花鳥風月の戯れ詩歌管絃の様
々に春秋を送り迎へしにいかなる折か來りけん木曾の棧橋かけ
てだに思ひぬ敵に落されて主上を始奉り一門の人も悉く花の都
を立出で西海の空に赴きぬ習ひぬ旅の道すがら山を越え海を渡
り暫しの天ざかる鄙の住居の身なりしに又立歸る浦波の須磨の

山路や一の谷生田の森に着しかば爰の都も程近しと一門の人々
も喜びをなし折節に　シテ上「範頼義經のその勢　同　雲や霞の如くに
て暫く戰ふといへ共平家の運もつき弓のやたけ心も弱々と皆散
々になりはて哀も深き生田川の身を捨てし物語語るぞ由なか
りける　ツヨク「嬉しやな夢の契の假初ながら親子鶺鴒の袖ふれて
同上　名殘盡きせぬ心かな　舞樂「あれに見えたるや.いかなる者ぞ何閻王
より.の御使とや片時の暇とありつるに今迄の遲參心得ずと閻王
怒らせ給ふぞと　同上　いふかと見ればふしぎやな〳〵黒雲俄か

に立來り猛火を放ち劍を降して其數知らざる修羅の敵天地を響かし滿ち〳〵たり「物々し明暮に馴つる修羅の敵ぞかしと太刀眞向にさしかざし髮やかしこに走り廻り火花を散らして戰ひしが暫くありて黑雲も次第に立去り修羅の敵も忽ちに消え失せて月澄み渡りて明々たる曉の空とぞなりたりけり「恥しや子ながらもかく苦しみをみる事よ急ぎ歸りてなき跡を懇ろに弔ひてたび給へと泣く〳〵袂を引別れ立去る姿のかげろふの小野の淺茅の露霜と形の消えて失せにけり〳〵※

ワキ詞

「是の大伴の黑主にてひ候も明日内裏にて御歌合有べしとて黑主が相手にの小野の小町を御定めひ。小町と申の歌の上手にて更に相手にの適ひ難くひ程にあすの歌を定めて吟ぜぬ事のひまし。かの私宅へ忍入り歌を聞かばやと存ひ「夫歌の源を尋ぬるに聖徳太子の救世の提闍片岡山の製を路生に弘め給ふ拠も明日内裏にて御歌合あるべきとて。小町が相手にの黑主を御定めひひて水邊の草といふ題を賜りたり面白や水邊の草といふ題に浮かみ

草紙洗小町

てゐ（ゐ）いかに蒔かなくに何を種とて浮草の波のうへ〳〵生ひ茂るらん此歌をやがて短册に寫さむらん　「いかに唯今の歌を聞て有るか　▲「さんぴ承てひ　「何と聞てあるぞ　「蒔かなくに何を種とて瓜蔓の畠のうねをまろび轉び歩くらん▼「いや左様にてのなきぞ道の道たるの常の道にのあらず知れるを以て道とす不得心なる事にてひへ共唯今の歌を萬葉の草紙に寫し帝へ古歌と訴へ申あすの御歌合に勝たばやと存じひツヨク「めでたき御代の歌合〳〵詠して君を仰がん　時しも頃の卯月半清涼

殿の御會なれば花やかにこそ見えたりけれ　「斯て人丸赤人の御影を掛け　「各々詠みたる短册を我も〳〵と取出し御影の前にぞ置きたりける　「偖御前の人々にの　「小町を始め河内の躬恒紀の貫之　「右衞門の府生壬生の忠岑　「左り右りに着座して　「既に詠をぞ始めける　ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ　同上　げに島隱れ入る月の〳〵淡路の繪島國なれや始めて歌の遊こそ心和〳〵道となれ其歌人の名所も皆庭上に並居つゝ君の宣旨を待居たり〳〵　「いかに貫之

「御前にゐ　王　「始より小町が相手にの黒主を定めたり先々小町が

歌を讀上げゐへ　「畏てゐ水邊の草蒔かなくに何を種とて浮草

の波のうねく生ひ茂るらん　王　「面白と詠みたる歌や此歌に勝

るのよもあらじ皆々詠じゐへ　「畏てゐ　「暫くゐ是の古歌に

てゐ　王　「何と古歌と申かワキ　「さんゐ　王　「いかに小町何とて古歌

をば申ぞワキ　「恥しの勅諚やな先代の昔のそも知らず既に衣通姫

此道のすたらん事を歎き和歌の浦わに跡を垂れ給ひ玉津島の明

神より此方皆此道をたしなむ也夫に今の歌をふる歌と仰ゐの古

今萬葉の勅撰にてゐか又の家の集にて有やらん作者の誰にてま

イ　シますぞ委く仰ゐへワキ　「仰の如く其證歌分明ならてのいかでか

奏し申べき草子の萬葉題の夏水邊の草との見えたれ共讀人知ら

ずと書きたれば作者の誰とも存ぜぬ也　「夫萬葉の奈良の天子

の御宇撰者の橘の諸兄歌の數の七千首に及て皆わらのが知らぬ

歌のさむらのず萬葉といふ草子に數多の本のゐか覺束なうこそ

ゐへワキ　「げにく夫のさる事なれ共去ながら御身の衣通姫の流

なれば憐む歌にて強かられば古歌を盜むの道理也　「扨のおこ

とや古への猿丸太夫のながれ夫や猿猴の名を以て我名をよそに立てんとや正しく夫や古歌ならず　「花のかげ行く山がつの

「其様賤しき身なられば何とて古歌とや見るべきぞ　「拠言葉を正さて誤りしや富士のなるさの大将や四病八病三代八部おなじ文字　「もしもかほどの誤りや　「昔も今も　「有りぬべし

同上　ふしぎや上古も末代も三十一字の其中に一字も変らで詠みたる歌是萬葉の歌ならば和歌のふしぎと思ふべしさらば證歌を出せとの宣旨度々下りしかば初めや立春の題なれば花も盡きぬとひ

き開く夏や涼しき浮草の是こそ今の歌也とて既に讀まんと差上れば我身にあたらぬ歌人さへ胸に苦しき手を置けりましてや小町が心の中唯とゝろきの橋打渡りて危き心の隙もなし　「恨めしや此道の大祖柿の本のまうち君も小町をば捨てはて給ふか恨めしやな　此歌古歌也とて左右の大臣其外の局々の女房達も小町獨を見給へば夢に夢見る心ちしてさだかならざる心哉此草子を取上げ見れば行の次第もしどろにて文字の墨付違ひたりいか様小町が獨り詠ぜしを黒主立聞し帝へ古歌と訴へ申さん爲に。

上歌「此萬葉に入筆したるとおぼえたり餘に耻しうさむらへば清き流れを掬び上げ此草子を洗はばやと思ひ候

貫之「小町は左様に申せ共若し又さなきものならば青丹衣の風情たるべし

シテ下「兎に角に思ひまはせ共やる方もなき悲しさに

同下「なく〳〵立てすご〳〵と帰る道すがら人目さがなや恥しや

貫之「小町暫く御待ち候へ其由奏聞申さうずるにて候いかに奏聞申候小町申候は唯今の萬葉の草子をよく〳〵見候へば行の次第もしどろにて文字の墨付も違ひて候程に草子を洗ひて見たき由申候

王「げに〳〵小町が申す如くさらば洗ひて見よと申候へ

貫之「畏て候いかに小町勅諚にてあるぞ急いで草子を洗ひ候へ

シテ上「綸言なれば嬉しくて落つる涙の玉襷結んで肩に打かけて既に草子を洗はんと

次第 同上「和歌の浦わの藻汐草〳〵波よせかけて洗はん

シテ上「天の川瀬に洗ひしは

地「秋の七日の衣なり

シテ「花色衣の袂には

地「梅の匂ひや交るらん

同上 打上 春蝉子 雁がれより 迄

「雁がねの翼は文字の数なれど跡定めればあらはれず頴川に耳を洗ひしは

シテ下「濁れる世をすましけり

地上「舊苔の鬚を洗ひしは

シテ「川原に解くる薄氷

地「春の歌を洗ひては霞の袖を解かうよ

シテ上 仍下ゲル 地上

「冬の歌を洗へば〳〵　「袂も寒き水鳥の上毛の霜に洗ゐん上

毛の霜に洗ゐん戀の歌の文字なれば忍び草の墨消え　「涙ゐ袖

に降りくれて忍草も亂る、忘れ草も亂る、　「釋教の歌のかず

かずゐ　「蓮の糸ぞ亂る、　「神祇の歌ゐ榊葉の　「庭火に袖

ぞ乾ける　「時雨にぬれて洗ひしゐ　「紅葉の錦なりけり

住吉の〳〵久しき松を洗ひてゐ岸によする白波をさつとかけ

て洗ゐん洗ひ〳〵て取上げて見ればふしぎやこゐいかに數々の

其歌の作者も題も文字の形も少しも亂る、事もなく入筆なれば

浮草の文字ゐ一字も殘らで消えにけり有難や〳〵出雲住吉玉

津島人丸赤人の御恵みかと伏拜み喜びて龍顔にさし上たりや

ワキ「能々物を案ずるにか程の恥辱よもあらじ自害をせんと罷立つ

シテ「のう〳〵暫く此身皆以て其名ひとりに殘るならば何かゐ和歌の

友ならん道を嗜む志誰もかうこそ有るべけれ　王「いかに黒主

ワキ「御前にゐ　王「道を嗜む者ゐ誰もかうこそあるべけれ苦しからぬ

事座敷へ直りゐへ　ワキ「是又時の面目なれば宣旨をいかで背くべ

き黒主御前に畏る　地上「けに有難きみぎん哉小町黒主遺恨なく小

町に舞を奏せよと各々立より花の打衣風折烏帽子をきせ申し笏
拍子を打ち座敷を静め　ヨワク「春來つてのあまねくこれ桃花の水
地「石に障て遅く來れり　「手まづさへぎる花の一枝　「桃色の衣
地仕舞終り迄　や重ぬらん　「霞立つ　中ノ舞　地上　「霞立てば遠山になるあさぼらけ　打上
日影に見ゆる松の千代迄松の千代迄四海の波も四方の國々も民
の戸ざしもさゝぬ御代こそ堯舜の嘉例なれ大和歌の起りのあら
がねの土にして素盞烏尊の守り給へる神國なれば花の都の春も
長閑に和歌の道こそめでたけれ

三番目　六浦　九月　前シテ里女　ワキ旅僧　後シテ楓の精女

ワキ　ワキ詞　ヨワク「思ひやるさへ遥なる〳〵東の旅に出ふよ　「是の洛陽の邊よ
り出てたる僧にてひ我未だ東國を見ずひ程に此秋思立ち陸奥の
果迄も修行せばやと思ひ　道行　逢坂の關の杉むら過がてに〳〵
行へも遠き湖の舟路を渡り山を越え幾夜な〳〵の草枕明け行く
空も星月夜鎌倉山を越え過ぎて六浦の里に着にけり〳〵
ワキ詞　「千里の行も一歩より起るとかや遙々と思ひひへ共日を重れて急
ぎひ程に是の早相模國六浦の里に着てひ此渡をして安房の清澄

へ參らうずるにてひ。又あれに由ありげなる寺のひを人にとへば。
六浦の稱名寺とかや申ひ程に立寄り一見せばやと思ひひのう
御覽ひへ山々の紅葉今を盛りと見えてさながら錦を晒せる如
くにてひ都にも斯樣の紅葉のひべきか又是なる本堂の庭に楓の
ひが木立餘の木に勝れ唯夏木立の如くにて一葉も紅葉せずひい
ふ謂のなき事のひまし人來りてひひば尋ねばやと思ひひ

女「のく御僧の何事を仰ひぞ

ワキ「さんび是の都より始て此所一見者にてひが山々の紅葉今を盛と見えてひに是なる楓の一葉も紅葉せずひ程に不審をなしひ

シテ「げによく御覽じとがめてひ。古へ鎌倉の中納言爲相の卿と申しゝ人紅葉を見とて此所に來給ひし時山々の紅葉未だなりしに此木一本に限り紅葉色深くたぐひなかりしかば爲相の卿取り敢ずいかにして此一本は時雨けん。と詠し給ひしより今に紅葉を留めてひ

ワキ「面白の御詠歌やな我數ならぬ身なれ共手向の爲に斯ばかり古果つる此一本の跡を見て袖の時雨ぞ山に先だつ

シテ「あら有難の御手向やな愈此木の面目にてこそひへ

ワキ「扨々先に爲相の卿の御

詠歌より今に紅葉を留たる謂のいかなる事やらん　「げに御不審の御理先の詠歌に預りし時此木心に思ふやうかゝる東の山里の人も通ぬ古寺の庭に我先立ちて紅葉せずのいかで妙なる御詠歌にも預るべき功成り名遂げて身退くの是天の道也といふ古き詞を深く信じ今に紅葉を留めつゝ唯常磐木の如く也　「是のふしぎの御事哉此木の心をか程迄しろしめしたる御身の扨いかなる人にてましますぞ　「今の何をか包むべき我の此木の精なるがお僧たつとくましますに唯今現れ来りたり今宵の夏に旅

居して夜もすがら御法を説き給のば重れて姿を見え申さんと

下歌同

夕べの空も冷しく此古寺の庭の面霧の籬の露深き千草の花をかき分けて行へも知らずなりにけり〳〵　中入

上歌

「所から心に適ふ稱名の〳〵御法の聲も松風も早更過ぐる秋の夜の月澄み渡る庭のおも寝られんものか面白やな〳〵　後シテ女上

「あら有難の御弔ひやな妙なる値遇の縁に引かれて一度爰に来りたり夢ばし覺まし給ふなよ　「ふしぎやな月澄み渡る庭の面に有つる女人と覺しくて影の如くに見え給ふぞや草木國土悉皆成佛の此妙文を疑給ので